

ともに挑む。ともに実る。

MIZUHO みずほ銀行

2024年9月2日

みずほディーラーズアイ (2024年9月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 141.00 ~ 151.00

金融市場部 為替営業第二チーム 伊藤 基

■ 先月の為替相場

8月のドル/円相場は7月末に行なわれた日銀金融政策決定会合後の植田日銀総裁の記者会見の内容などをきっかけに、月を通して円買いドル売りが優勢な展開となった。

(第1週目)月初1日のドル/円は149円78銭でオープン。流動性の低い中、日経平均株価の下落に伴いドル円も軟調な推移。2日も同様に日本株の大幅下落を受け、上値が重い展開となり、米7月雇用統計が予想を下回る結果になると、146円40銭台まで下落。

(第2週目)5日は、植田日銀総裁のタカ派な発言と前週末の米7月雇用統計の軟調な結果を背景に日本株と共に売られ、月中安値である141円68銭まで急落。6日には反発する日経平均株価に合わせて146円30銭台まで上昇。7日、内田日銀副総裁の講演内容が市場に伝わると、円売りが進み147円90銭台まで上昇。一方で、週末にかけては連休を前に実需によるドル売りフローが入ったことで、146円60銭台まで下落。

(第3週目)12日、日本が休場で薄薄いとなる中、早々に148円前半まで上昇。13日に米7月生産者物価指数が予想を下回り、再び146円台半ばまで下落。14日には岸田首相の自民党総裁選不出馬報道を受けて円買いが進む場面も見られたものの、15日には堅調な米7月小売売上高の結果を受け、月中高値となる149円40銭まで上昇する場面が見られた。

(第4週目)19日、カナダ企業による日本企業買収報道などが材料視され、145円台前半まで下落したものの、米金利の下げ止まりと米株高を受けて146円台半ばまですぐに持ち直す。21日、7月FOMC議事要旨にて利下げ開始に前向きな意見が散見されたことを受け、144円台までドル売り円買いが進む。しかし22日には、底堅い米PMIの結果やFRB高官の発言を受け、146円台半ばまで反転上昇。23日、植田日銀総裁の衆参委員会での発言を受け、円高圧力が強まったものの、パウエルFRB議長のジャクソンホールでの講演前には東京時間での下げ幅を取り戻す。パウエルFRB議長の講演では9月会合での利下げ開始が強く意識される内容となったことから、ドル売り圧力が強まり、144円ちょうど付近まで下落。

(第5週目)26日には143円台半ばまで下落。その後は目立った材料がない中で、緩やかに持ち直し144円台半ばを中心とした値動き。28日には氷見野日銀副総裁の講演があったものの目新しい情報は見当たらず。29日に米4-6月期GDP(改定値)が堅調な結果になると145円50銭台まで上昇する場面が見られた。

■ 今月の見通し

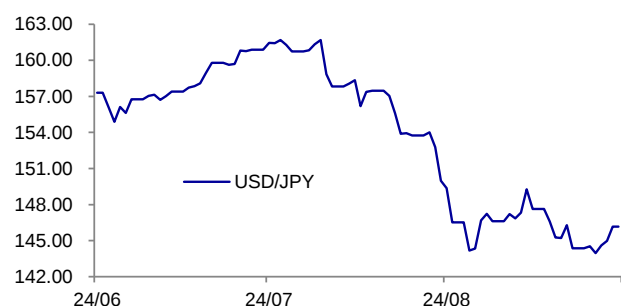
今月のドル/円は、一転して円安ドル高の流れが強まると予想する。米国経済について見ると、7月後半に公表された4-6月期実質GDP成長率は、前期比年率2.8%と市場予想を上回ったことに加えて、前期(1-3月期)からプラス幅が拡大。歴史的に高い金利水準にもかかわらず、米国経済は底堅く推移している様子がうかがえる。こうしたなかで、これまでFedの悩みの種だった物価については、上昇圧力が着実に鈍化している。米7月CPIおよびPPIはともに市場予想を下回っているだけに、突発的な事象が発生しない限り先々の物価に関する懸念はほとんどないと考えられる。また、労働市場については最新の雇用統計では、賃金上昇圧力や雇用者数の伸びは着実に鈍化している。失業率の上昇はやや気になる点であるものの、内訳を見れば、失業者だけでなく労働力人口も増えているだけに、労働市場が一気に冷え込んでいる様子は現時点で確認できない。こうした景気認識を前提にするならば、当然のことながらFedは利下げの階段を下りていく局面に入っているとと言える。7月FOMCの議事要旨では9月会合にて利下げを行うのが妥当とみている参加者が多くを占めていることが明らかになっているだけに、初回の利下げについては9月会合にて行われるとみている。

注目される利下げ幅については現状のマクロ経済環境を踏まえれば、無理に利下げを急ぐ必要はないだけに0.25%ポイントになるだろう。その後の利下げパスについてはあくまでも経済状況次第ではあるものの、基本的には0.25%ポイントずつ進めることになるだろう。一方で、市場では年内の会合で0.25%の利下げを4回以上織り込んでいるだけに、時間が経つにつれて市場の織込み度合いは修正され、その過程で米金利は上昇、ドル円にも上昇圧力がかけやすい環境になるだろう。

また、7月以降のドル円急落の裏には、投機筋による円キャリー取引のアンワインドといった影響も多分にあった。現に、投機筋の円ポジション(市場でのネット)は数年ぶりにロングに傾いている。しかし、ここから円ロングのポジションが新たに構築される可能性は低いと考えるべきである。円のロングポジションにはそれなりのコストがかかることに加えて、円ロングを正当化できるほど日銀がタカ派に傾く公算も低い。8月中旬に行われた衆参委員会での植田日銀総裁は、あくまでも経済物価見通しが日銀の想定通りに進んだ場合に利上げを進めるスタンスを示しており、連続的な追加利上げのハードルは決して低くない。こうした点を考慮すると、結局は時間とともに徐々に円ショートポジションが再構築されるのが自然であろう。

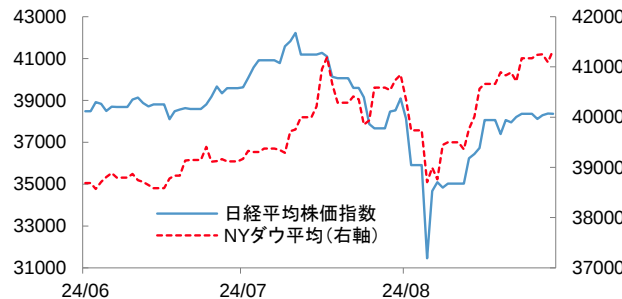
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	ISM製造業景況指数	7月	48.8	46.8	48.5
8/2	非農業部門雇用者数変化	7月	175K	114K	206K
8/2	失業率	7月	4.1%	4.3%	4.1%
8/2	平均時給(前月比)	7月	0.3%	0.2%	0.3%
8/2	平均時給(前年比)	7月	3.7%	3.6%	3.8%
8/5	ISM非製造業景況指数	7月	51.0	51.4	48.8
8/14	CPI(前年同月比)	7月	3.0%	2.9%	3.0%
8/14	コアCPI(前年同月比)	7月	3.2%	3.2%	3.3%
8/15	小売売上高(前月比)	7月	0.4%	1.0%	-0.2%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	3名	149.00 ～ 141.00	ベア	10名	147.00 ～ 140.00	※ レンジは中心値
河合	ベア	147.00 ～ 140.00	8月大きく水準を切り下げたドル円は、今月中旬の日米中銀イベントを控え、先月のパウエル米FRB議長の発言後の大幅な米利下げに対する過度な期待は後退しているが、米雇用関連指標の結果次第では、年初来安値の更新もあるか。			
加藤	ベア	146.50 ～ 138.00	日米金融政策の先行きが見えてきたことにより政治と戦争にこれまで以上に注目。政治については高市さん、ハリスさんは円安リスク。トランプ優勢であればウクライナ支援縮小によるインフレ鈍化を強く意識することになり円高圧力継続。			
山崎	ベア	147.50 ～ 139.00	ドル円は下方向を予想したい。政策変更は織り込まれているとしても、今後はその織り込みがどのレベルまで進むかの問題か。速度の議論はるとしても、下方向へ向かっていくものと予想。			
山口	ベア	147.00 ～ 142.00	米国による9月の利下げはダンディールではあるものの、9月に発表される米雇用関連指標が予想を下回る結果となると大幅利下げの可能性から米金利は一段と低下し、ドル円も上値重く推移すると予想。			
田川	ブル	147.00 ～ 140.00	米利下げは織り込み済み、日銀の利上げに対してヒントが出るかどうかだろう。ただ、7月は10円、8月は5円、ドル円は下落しており、ファンダメンタルズ云々というよりもトレンドフォローで乗り遅れないことが目先は重要か。			
松永	ブル	149.00 ～ 141.50	市場の注目が米国のインフレから雇用状況に移るが、8月の週次の雇用指標は7月からの悪化は見られず9月公表の雇用統計は改善を予想。気堅調な消費動向もありドルの持ち直しを予想する。			
大熊	ベア	147.00 ～ 140.50	足元の米経済指標は底堅い結果が散見され、9月の大幅利下げ観測は後退している。しかし利下げはほぼ確実と見られる中、日銀との金融政策の方向性の違いから、積極的なドル買いには動きづらいか。			
范	ベア	147.00 ～ 140.00	FRBが利下げフェーズに入り、金利低下バイアスが続く中でドル円は上値重く推移するものと予想。一方の日銀は追加利上げの可能性が残っており、期待が高まる局面では円買いとなろう。			
伊藤(基)	ブル	151.00 ～ 141.00	市場はFedが年内に0.25%の利下げを4回程度織り込んでいるが、米国マクロ環境を踏まえれば、これは行き過ぎだろう。こうしたなか、海外勢が本格的に夏休みから復帰するなか、再度ドル買いポジションを構築し始めるだろう。			
鈴木	ベア	147.50 ～ 140.00	現状の織り込みはやや行き過ぎ感があるものの、米国の利下げ開始が目前に迫っていることは事実。日銀の正常化に対する姿勢との差異が材料視され、ドル円は上値の重い値動きになることを予想する。			
西	ベア	147.00 ～ 141.00	米国の景気動向に対する懸念は過剰であると考えているが、懸念の払拭は容易ではない。日銀のタカ派姿勢も背景に上値の重い時間が続きそう。市場で織り込まれている年内4回利下げが剥落する展開も視野に入れておく必要があるだろう。			
南野	ベア	148.50 ～ 140.00	月前半は中銀イベントや日本の総裁選をにらんで神経質な展開となりそう。月半ばからはFOMCの結果を踏まえて方向感が決まり始めるか。FEDがハト派な姿勢を維持すればドル円は下方向に推移するだろう。			
松木	ベア	147.00 ～ 140.00	米8月雇用統計など指標次第だが、9月FOMC会合にて50bpの利下げ余地があるという点で依然として下落リスクは残る。日銀が金融政策正常化姿勢を維持していることも投機筋の円ショート構築の重石だろう。			

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0950 ~ 1.1250
EUR/JPY 156.00 ~ 162.00

金融市場部 為替営業第二チーム 山口 朋子

■ 先月の為替相場

8月のユーロ/ドルは月後半にかけて上昇し、年初来高値を更新する展開となった。

月初ユーロ/ドル1.0826で取引を開始。取引開始直後に一時1.0778と月安値を付けた。その後も独金利低下や米株下落が重しとなり、1.08近辺での上値の重い展開が続いた。ただし、2日に発表された米7月雇用統計の弱い結果を受けドル全面安となると、ユーロ/ドルは1.0926まで急反発した。

翌週5日には米金利の低下継続を受け、ユーロ/ドルは一時1.10台まで上昇。ただし、発表された米7月ISM非製造業指数の強い結果を受けた米金利反発が重しとなると、1.09ドル台半ばまで低下。6日は独金利の低下や欧州株安が重しとなり、1.0904まで値を下げた。その後も1.09台を中心した狭いレンジでの推移となった。9日に発表された独7月CPI確報値は予想通りの結果となり、市場反応は薄かった。13日以降はドル売り優勢となる中でユーロ/ドルは上昇に転じた。この日発表された米7月PPIの市場予想比下振れると、ユーロ/ドルは1.10台へと再び上昇。翌14日は米7月CPI発表後に米金利が低下に転じたこともあり1.1047へ続伸。15日の米7月小売売上高発表後に1.0950へ下落後、米金利の低下が下支えとなるも、16日米住宅指標の弱い結果を受けドル売り優勢となり1.10台を回復。

週明け19日は欧州株高や米経済指標の冴えない結果に支援され、ユーロ/ドルは1.10台後半に上昇。さらに20日には米金利続落が好感され、節目の1.11を突破。21日、米雇用統計年次基準改定公表を控え一時的に1.11を割り込む場面もあった。22日発表された7月会合分の欧州中央銀行(ECB)政策理事会議事要旨では賃金鈍化への自信を強調するなどややハト派な内容が確認されるも、市場は9月会合での利下げが織り込み済みのため反応は限定的だった。一方で、23日にパウエルFRB議長がジャクソンホールシンポジウムでの講演で「インフレ率が目標への道筋をたどっているという確信を深めた」と発言したことを受け米金利が低下する動きに、ドル/ユーロは1.1202まで上昇し、年初来高値を付けた。26日に発表された独8月IFO企業景況感指数が予想を上回り、さらに27日に米金利低下に伴うドル売りにサポートされて、ユーロ/ドルは高値での推移が続いた。ただし、28日は米独金利差の拡大が嫌気され、1.11付近に軟化した。さらに29日に発表された欧州各国の8月CPI速報値の弱い結果を受けた欧州金利低下に加え、複数の強い米経済指標を受けた米金利上昇も重しとなり、1.10台までに反落した。

■ 今月の見通し

8月のユーロ/ドル相場は高値圏での推移を予想。

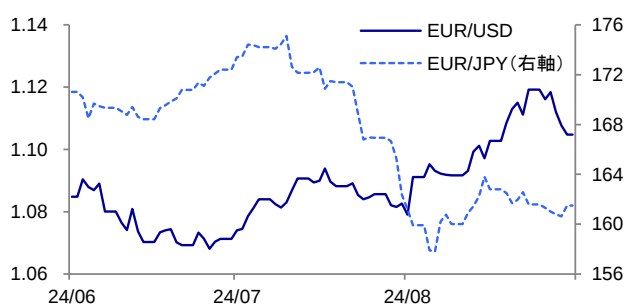
8月のユーロ/ドルは年初来高値を付けたが、ユーロを積極的に買う動きがあったというよりは米雇用市場の落ち込み等を受けたドル安がメインドライバーとなった。9月は欧米どちらも金融政策の変更が予想されており、各中銀の動向に注目したい。ECBについては9月会合で25bpの利下げが予想されている。22日に発表されたユーロ圏の4～6月期の域内妥結賃金は前年同期比+3.55%と、1～3月期のから大幅な減速が確認された。今回の減速はドイツやフランスが主導しており、ECBの9月利下げを後押しする結果となった。さらに、政策金利の現状維持を決めた7月理事会の議事要旨では、連続利下げを行う必要性には乏しいものの、その次(9月)の理事会で利下げを議論する可能性が示唆されている。今後発表されるデータを見ながら、四半期に1度程度段階的な利下げを行うという味方が優勢。一方、米国経済の弱さも見られ始めており、ECBより早いペースで利下げを実施する可能性もある。9月に発表される米雇用関連指標が市場予想を下回る内容となると、米金利が一段と低下し、ユーロ相場は下支えされる展開となろう。

一方で経済指標に目を向けると6日発表の6月小売売上高は前月比▲0.3%とマイナスを記録。さらに13日発表の8月ZEW景気期待指数は市場予想比下振れた。22日に発表された8月のHCOBユーロ圏サービス業PMIこそは市場予想を上回ったものの、フランス五輪の影響もあるため、引き続き数字を確認する必要がある。欧州圏の経済指標の大きな悪化はないものの、低成長が続いている中、ユーロを積極的に買う動きにはなりにくい。

さらに、政治リスクも意識したい。フランスではマクロン大統領が左派政党の首相候補者の任命を拒否した。これを受け新首相任命の協議は難航しており、政治不安が再び台頭する可能性がある。また、9月にはドイツ東部では3つの地方選挙が予定されている。州レベルの選挙ではあるが、極右に加え極左の台頭が鮮明となれば、来年に控える連邦議会選挙での政治的不透明感が一段と高まる恐れもあろう。政治リスクが高まる局面ではユーロ売りに警戒したい。

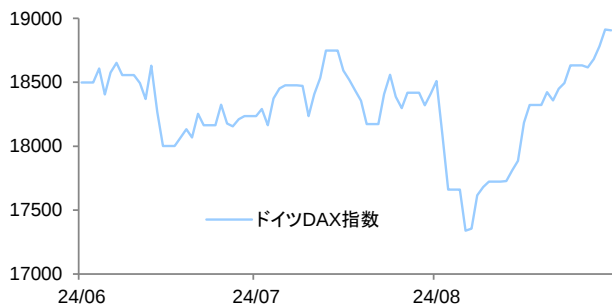
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/6	ユーロ圏小売売上高	6月	-0.1%	-0.3%	0.1%
8/12	独経常収支	6月	-	23.2b	18.4b
8/13	独ZEW景気期待指数	8月	34.0	19.2	41.8
8/14	GDP(季調済/前期比)	2Q	0.3%	0.3%	0.3%
8/14	GDP(季調済/前年比)	2Q	0.6%	0.6%	0.6%
8/20	ユーロ圏CPI(確報)	7月	2.6%	2.6%	2.5%
8/22	HCOBユーロ圏製造業PMI	8月	45.8	45.6	45.8
8/22	HCOBユーロ圏サービス業PMI	8月	51.7	53.3	51.9
8/26	独IFO企業景況感指数	8月	86.5	86.5	87.1
8/30	ユーロ圏CPI(前月比)	8月	0.2%	0.2%	0.0%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	4名	1.1275 ～ 1.0975	ベア	9名	1.1200 ～ 1.0850	※ レンジは中心値
河合	ブル	1.1300 ～ 1.1000	8月年初来高値を更新したユーロドルは、今月中旬の欧米中銀イベントを控え、欧米の利下げペースが焦点に。相対的な市場インパクトの強弱から、米雇用関連が弱いものとなれば、ユーロドルは底堅い推移が継続か。			
加藤	ベア	1.1150 ～ 1.0900	予想通り賃金さが下がり始めたユーロ圏ではあるものの、FRBの金融緩和も明確になってきている。最大の貿易黒字に裏打ちされた域内の需要はそれなりに維持されており、調整的なユーロ下落があったとしても大きなものにはならなそう。			
山崎	ブル	1.1350 ～ 1.1000	米ドル利下げの織り込みが強まるにつれて、ドル安傾向に動きやすい地合いと考える。よって上方向への推移が基調として継続すると考えるが、米国指標やヘッドラインには注意したい。			
山口	ベア	1.1250 ～ 1.0950	8月は年初来高値を付けたものの、ユーロ買いというよりはドル売りの流れを受けての動きと見ている。ECB、FRBどちらも9月に利下げ実施を予想しており、相場を大きく動かす要因とはならないと予想。			
田川	ベア	1.1180 ～ 1.0700	先月の本欄と見通し変わらず。利下げについてはFRB・ECB共に織り込みが進んでいる状況。経済指標についてまだ粘り強さを見せる米国に対して、減速がみられる欧州、という図にユーロ軟調を想定。			
松永	ベア	1.1200 ～ 1.0800	米国の利下げ期待の高まりに加え、ユーロの利下げ余地の小ささや高止まりするサービスインフレの状況もありユーロは堅調な動きが続くが、欧州経済の状況を踏まえれば積極的にユーロを買い進む材料には乏しい。上値の重い展開を予想。			
大熊	ブル	1.1250 ～ 1.0950	米景気後退懸念が高まる一方で欧州景気は底打ち感があり、ECB内では利下げを急ぎすぎるべきではないとの声もある。ECBが利下げに向かうことは既定路線ではあるが、ドル軟調がサポートとなり、ユーロは底堅い動きを予想。			
范	ベア	1.1200 ～ 1.0900	インフレ鈍化ペースがFRB対比で速い欧州圏は売られやすい状況が継続か。加えて、仏政治の不透明感からユーロは上値重く推移するだろう。			
伊藤(基)	ベア	1.1200 ～ 1.0700	足元、ユーロは堅調に推移しているが、これはドルが過度に弱くなっている裏返しであり、ユーロが強いわけではない。加えて、ユーロ圏の大黒柱ドイツの経済は冷え込んでいるだけに先々は次第に軟調な推移を余儀なくされるだろう。			
鈴木	ベア	1.1250 ～ 1.0850	米国と同様に利下げ織り込みが進んでおり、金融政策の差による値動きは想定できない。ただ域内の景気動向において、未だ粘り強さを示せる米国との差異が目立つため、ユーロは軟調な推移になることを予想する。			
西	ベア	1.1200 ～ 1.0900	9月ECBでの利下げは織り込み済み。物価は減速基調であるほか、景況感も低調。仏政治が停滞していることなどから、ユーロは上値の重い推移を想定。米国の景気動向に懸念が広まる場合は、相対的に買われる可能性があるだろう。			
南野	ベア	1.1200 ～ 1.0800	先月はドルがユーロに対して弱含んだが、茲許の経済指標の結果では、欧州経済の減速が目立っている。FOMCとECBの両中銀で利下げすることを前提に、月を通してややドル買い優勢の展開になるか。			
松木	ブル	1.1200 ～ 1.0900	欧米ともに9月の中銀会合で利下げ実施が既定路線であり、概ねレンジ内でもみ合いが基本線。米国対比でユーロ圏の景気に陰りがみられていることは上値を抑える要因だが、FRBのハト派余地がユーロのサポート要因。			

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2900 ~ 1.3500
GBP/JPY 187.00 ~ 200.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

8月の英ポンド相場は月初こそグローバルなリスクオフに巻き込まれるかたちで対ドルで1.2862から1.2666まで約▲1.5%下落する場面もあったが、その後は一転して上昇し、20日には7月17日につけた1.3044の年初来高値を上げ、27日には1.3269と2022年3月以来の高値水準まで上昇。月末にかけてはややポンド安となっているが、それでも先月末から約+2.4%で上昇した水準で推移している。ポンドは対円では7月末の193円前後から8月末時点で191円前後に値を切り下げた一方、対ユーロでは月初の下落を完全に取り戻す格好となっており、総じて底堅さが目立つ。

第1週のポンドは対ドルで▲0.5%下落。1日にはBOEが4年5か月ぶりの利下げを実施した。市場の織り込みは5分5分の状況だった。BOEの委員の中でも利下げ票5に対し、据え置きが4票と僅差の決定となった。ベイリー総裁は「急過ぎや過剰な」利下げには慎重な姿勢を表明したほか、利下げ支持の一部の委員は「微妙なバランス」で判断したとしている。フォワードガイダンスも前回6月とほぼ変わらず。追加利下げの時期に関する指針は示されず、選択の余地が残された格好だ。

第2週のポンドは週初の8月5日から6日にかけてグローバルなリスクオフを受けて対ドルで約▲1%、対円では約▲4%もの大幅下落となった後、週後半にかけて持ち直す展開となった。マーケットの反応は限定的だったものの、英国では極右の暴動と、極右暴動に対抗する形で通りを埋め尽くした数万人規模の反極右デモが英メディアでは注目を集めた。

第3週のポンドは対ドルで約+1.5%反発。7月米消費者物価指数(CPI)や米7月小売売上高の発表を受けてリスクセンチメントが改善。英国経済指標は総じて底堅い景気と、賃金・インフレ圧力の緩やかな減速を示唆するものとなった。4～6月期のGDPは、前期比+0.6%と前期(同+0.7%)並みの成口率を維持した一方、5～7月の平均賃金の伸び率は前年比+4.2%と4～6月の同+4.4%から減速した。

第4週のポンドは対ドルで約+2.0%反発。対ドルで年初来高値をつけた。米利下げ期待を背景とするグローバルなドルの下落が背景にある。パウエル議長は23日のジャクソンホールでの講演で、「政策を調整する時が来た」とし、9月会合での利下げを予告した。一方、BOEのベイリー総裁は「インフレの二次的波及効果は予想よりも小さい」としながらも、「インフレが中期的にターゲットを維持することへのリスクが解消されるまで、十分な期間、金融政策は抑制的であるべき」とした。

■ 今月の見通し

9月以降も、英ポンドの堅調な展開は続くと思われる。(1)8月のPMIが製造業・サービス業ともに中立水準を上回る水準から一段と改善したように英国の景況感が(特に対ユーロ圏との比較では)上向きとなっていること、(2)同じくユーロ圏のドイツ、フランスと比較して政治情勢が安定していること、(3)BOEが追加利下げに対して慎重なスタンスをとっていること、が背景に挙げられる。

(3)の点について、ベイリー総裁は23日のジャクソンホール会議での講演の中で、「インフレの二次的波及効果は予想よりも小さい」としながらも、「インフレが中期的にターゲットを維持することへのリスクが解消されるまで、十分な期間、金融政策は抑制的であるべき」とした。BOEは8月会合で利下げを開始したが、追加の金融緩和は慎重に行う姿勢を改めて示した形だ。BOEの9月19日の会合での追加利下げの可能性はほぼ消滅したと見られ、順当に行けば、四半期に一回(次は11月)のペースでの金融緩和が検討される公算が大きい。ジャクソンホール会議ではFRBのパウエル議長が「金融政策を調整する時が来た」と述べて来月の会合での利下げを「予告」しているが、利下げに前のめりの印象を受けたFRBとの対比で、BOEの姿勢はタカ派的となっている。

9月も引き続き、米国経済・金融政策の動向が焦点となろうが、英国国内の材料では財政が焦点となる。英国のスターマー首相は27日の講演で「10月発表の予算は痛みを伴う」「長期的な利益のために短期的な痛みを受け入れるよう、国民に大きなお願いをしなければならないだろう」と述べている。増税・歳出削減の可能性は以前から意識されていたものの、どのような施策が打ち出されるかは不透明な部分が大きい。景況感への影響には一定の注意が必要であろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に伝わる怖い話』

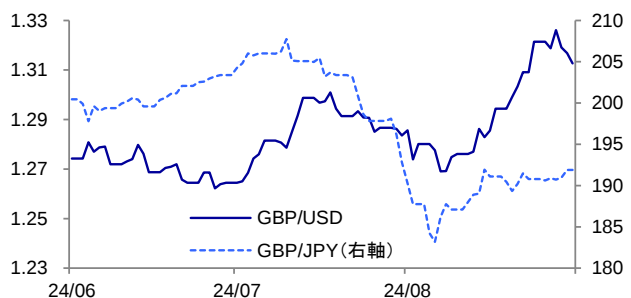
家族がお化け屋敷などに耐性が無いことや、私自身も進んで怖いものを見たいとは思わない(映画「エリザベス」で生首が出てくるシーンを見ただけで嫌な気持ちの数日間続きました)ので、まだ行ったことが無いのですが、ロンドンには当地の黒歴史を体験できるテーマパーク「ロンドンダンジョン」があります。

妻を次々と処刑したヘンリー8世、切り裂きジャック、スウィーニー・トッドから、ロンドン大火、その他拷問、処刑に至るまで、視覚・聴覚だけでなく体全体でスリルを味わうことのできるテーマパーク、とのこと。どう考えても行きたくありません。。周りの英国人に聞いても、行った人はいないとのことでした。地下鉄の駅にもよくポスターが貼りだされているので、それなりに人気のアトラクションのようです。

ロンドンを訪れた方&訪れる予定の方で、「ロンドンダンジョン」に行かれた方がいらっしゃいましたら、ぜひお話を聞かせてください。

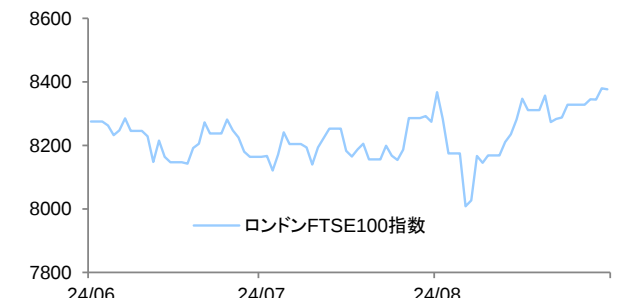
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	イングランド銀行政策金利	6月	5.00%	5.00%	5.25%
8/13	週平均賃金(前年比)	5-7月	4.6%	4.5%	5.7%
8/13	失業率	6月	4.5%	4.2%	4.4%
8/14	CPI(前年比)	7月	2.3%	2.2%	2.0%
8/15	GDP(前期比)	Q2	0.6%	0.6%	0.7%
8/15	鉱工業生産(前月比)	6月	0.1%	0.8%	0.3%
8/15	製造業生産(前月比)	6月	0.2%	1.1%	0.3%
8/16	小売売上高(前月比)	7月	0.6%	0.5%	-0.9%
8/22	製造業PMI	8月	52.2	52.5	52.1
8/22	サービス業PMI	8月	52.8	53.3	52.5

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6430 ~ 0.6900
AUD/JPY 91.40 ~ 100.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

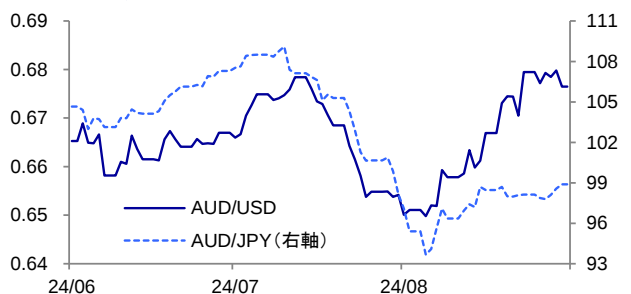
8月の豪ドルは1日はリスクオフの流れから0.6540から0.65近辺まで下落。2日は軟調な米7月雇用統計を背景に0.65台半ばまで上昇も勢いは続かず0.65台前半へ。5日はシドニー銀行休日で流動性が低い中、軟調な株価を背景にリスク回避の流れが顕著になり、ストップを巻き込みながら一時0.6349まで下落した。但し即買い戻されて0.65近辺で引けた。豪ドル円は一日を通し90円台前半から95円台半ばで振幅。6日、RBA理事会で政策金利据え置きが発表され、豪中銀によるインフレと経済成長の見通しが引き上げられた。豪国債利回りは短期債を中心に上昇、豪ドルは0.6540まで上昇。7日、内田日銀副総裁のハト派的な発言を受けて円安が進行すると、豪ドル円が上昇した。8日、ブロックRBA総裁がインフレリスクを警戒しており「必要なら再度利上げも躊躇わない」とタカ派姿勢を改めて示した事が豪ドルを支えた。米新規失業保険申請件数が予想程悪化しなかった事が好感され、米株価が大幅高に。豪ドルは0.6590まで上昇。9日、中国7月CPI、PPIがいずれも予想を上回り、中国株が上昇する中で一時0.66台にのせたが上値は伸びせず0.6570まで下落した。13日、豪4〜6月期賃金指数は強弱入り混じる一方で米7月PPIが予想を下回り、米国利下げ期待から豪ドルは上昇。14日、RBNZが予想よりも早いタイミングで25bp利下げに踏み切ると豪ドルも連れ安となった。15日、豪7月雇用統計で強弱入り混じる結果や堅調な米7月小売売上高に豪ドルが弱含んだ。19日、ジャクソンホールを控え、リスク選好度の高まりを受けて株価が上昇幅を拡大。豪ドルは0.6730近辺まで上昇。20日、8月RBA会合議事要旨では短期的に利下げの可能性は低いとの見解で一致した事が明らかになった。但し、タカ派姿勢を維持した事から市場の反応は限定的であった。21日、米7月FOMC議事要旨では「幾人かの当局者は7月利下げの論拠を指摘」「大多数のメンバーが9月利下げが適切との考えを示した」とハト派な内容だった事で米金利は低下し、豪ドルは0.6761まで上昇したが、再び0.6740近辺まで売り戻された。23日、パウエルFRB議長によるジャクソンホールでの「利下げの時が来た」との発言が伝わると、米金利が大幅低下。豪ドルは0.6798まで上昇した。28日は豪7月CPIは電気料金の補助が下押し要因となり、前回値3.8%から3.5%へ鈍化した予想3.4%を上回った。発表直後は豪3年国債利回りが上昇すると、豪ドルは買いで反応し0.68台のせ。0.6813まで上昇したが長くは続かず、月末にかけて0.67台後半で振幅した。

■ 今月の見通し

9月の豪ドルはレンジ上方での振幅を予想する。先月23日、ジャクソンホール経済シンポジウムにおけるパウエルFRB議長の「利下げの時がきた」「インフレ率が当局の目標である2%への軌道にあるとの確信を強めた」との発言を受け、足元の金利市場では年内3回のFOMC会合で、計約1ptの利下げを想定している。9月17〜18日にFOMC会合での利下げが確実視されているわけだが、織り込み済みではあるにせよ、実際に金利差が縮小する過程で豪ドルでのドルロング解消のフロー発生の可能性が考えられることから、底堅く推移する事を見込む。その後24日(火)開催予定のRBA会合でこれまでのタカ派スタンスを引き続き貫くかが焦点となる。先月13日発表の4〜6月期の賃金上昇率は前期比で僅かに鈍化し、前年比4.1%と前四半期から横ばいとなったものの、インフレ率がRBA目標の2〜3%レンジに入るにはなお高い水準である為、より長い期間、豪政策金利の据え置きを示唆し、年内利下げ期待を後退させた。加えて28日発表の豪7月月次CPIでは前回値3.8%から3.5%へ鈍化こそしていたものの市場予想3.4%を僅かに上回った。政府による電気料金の補助プログラムにより、7月の電気料金は前月の+7.5%から▲5.1%へかなりの落ち込みとなり、CPI鈍化に寄与したが、反対にこの補助プログラムがなければ電気料金は+0.9%となっていたことから、CPI鈍化ペースの減速がインフレ上昇リスク懸念を醸らしている。米豪金融政策方針の違いが顕著になる場合は更にドル売り優勢となる事から豪ドルの0.68台定着し、上値を伸ばす可能性がある。9月RBA会合ではタカ派スタンスを維持する可能性が高いが、政策運営について新しい材料が出てくるか確認したい。この他、中東紛争による地政学リスクの高まりから、豪ドルが頭を押さえられる可能性にも注意を払いたい。

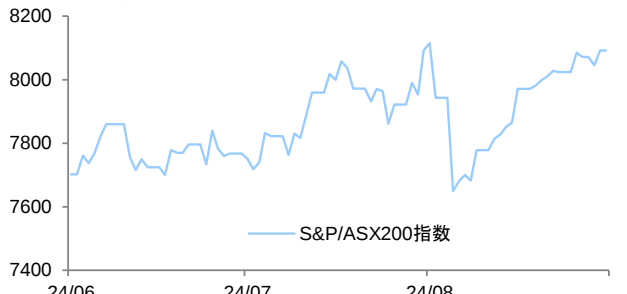
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
8/1	貿易収支
8/6	RBAキャッシュレート
8/13	賃金指数(前年比)
8/13	賃金指数(前期比)
8/15	雇用者数変化
8/15	失業率
8/15	参加率
8/28	CPI(前年比)
8/28	CPIトリム平均値(前年比)

(資料) ブルームバーク			
期間	予想	結果	前回
6月	A\$5000m	A\$5589m	A\$5052m
8月	-	-	-
2Q	4.0%	4.1%	4.1%
2Q	0.9%	0.8%	0.9%
7月	20.0k	58.2k	52.3k
7月	4.1%	4.2%	4.1%
7月	66.9%	67.1%	66.9%
7月	3.4%	3.5%	3.8%
7月	-	3.8%	4.1%

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD 1.3200 ~ 1.3700
CAD/JPY 105.00 ~ 108.50

米州資金部カナダ室 芦崎 瑞穂

■ 先月の為替相場

月初は1日の米7月ISM製造業指数や2日の米7月雇用統計が悪化したことを受け、米経済減速への懸念が高まった。世界経済へも波及するとの過度な警戒感から株は大幅下落。市場ではFRBにより9月に0.50%の大幅利下げが行われるとの観測が急速に高まるなど、一時パニック状態に陥った。USD/CADは5日にオーバーナイトで1.3946まで上昇。しかし混乱は長く続かず、5日に発表された米ISM非製造業指数が前回から改善し予想を上回ったことや、FRB当局者からの“米経済は景気後退に陥っていない”とのタカ派発言を受け、市場は徐々に落ち着きを取り戻した。USD/CADはオーバーナイトで1.3793まで反落。更にイランがイスラエルへ報復攻撃を行う可能性があるとの報道に原油価格が上昇すると、カナダドルが買われ1.37台半ばへと続落。

13日の米7月生産者物価指数(PPI)は総合、コア共に予想を下回り伸びが鈍化していることが示され、翌日14日にも米7月消費者物価指数(CPI)が市場予想より弱めとなり、インフレ鈍化が確認された。USD/CADは緩やかに1.36台後半へと下落したが、想定内の結果に市場の反応は限定的となりレンジ取引が続いた。15日、米7月小売売上が予想外に好調な結果となり、米失業保険申請件数も減少し、米経済の底堅さが示された。FRBによる0.50%の大幅利下げ観測が後退。世界の株式市場も安定し、リスク選好ムードが続くUSDドル売りの流れが継続。20日カナダ7月消費者物価指数(CPI)が総合とコア指標共に低下したことから、カナダドルが1.3641まで一時売られたが、USDドル下押し圧力は強く、1.36台前半へと下落。21日米労働省は2024年3月までの1年間の雇用統計についての推定値を公表し、非農業部門の雇用者数を818k程度下方修正した。米労働市場が更に冷え込んでいたことが示された。またFOMC議事要旨では9月の利下げ開始が示唆され、インフレの減速傾向と失業率の上昇を受け、29日にも利下げ開始の議論が行われていたことが示された。USDドル売りが加速し、USD/CADは1.357付近まで値を下げた。23日、注目のジャクソンホール会議ではパウエルFRB議長から9月の利下げを示唆する発言があり、USD/CADは1.3499まで一気に急落。27日にはUSDドル安が1.3441まで進んだが、29日米第2四半期GDP改定値の上方修正や、米失業保険申請件数の良好な結果に、USD/CADは1.34台後半へと値を戻したが、市場は9月6日の米8月雇用統計の発表待ちで様子見ムードが強く、上値は限定的となり狭いレンジで推移した。

■ 今月の見通し

先月公表された7月24日に開かれたカナダ中銀会合議事要旨では、国民一人当たりのGDPの低下、個人消費の減速、失業率上昇など経済の下振れリスクが示された。またインフレ率が途中で目標の2%を下回る可能性をより重視しているとの言及があった。

7月の消費者物価指数(CPI)では旅行ツアー、自動車、電気料金などの広範囲な分野で価格上昇圧力の低下が見られた。食品と住居のインフレが依然として高いことが懸念されているが、その勢いは失われつつある。

労働市場では失業率が6.4%に上昇。これは2年前の夏の歴史的最低値よりも2パーセント近く高い。雇用が人口増加に追い付かない状況が続いており、過去5年以内にカナダにきた移民の失業率は12.6%に上昇した。移民の若者の失業率は22.8%に上昇。移民流入による人口増加により、住宅需要も高く、カナダ7月住宅着工件数ではオンタリオ州で大きな伸びが記録されたが、依然として2021年と2022年の高水準を下回っている。

また、カナダ中銀は6月、7月と連続で利下げを行っているが、消費者が引き続き支出を抑えていることが示されている。利下げにより回復も見込まれているが、時間がかかると思われる。市場ではカナダ中銀が3回連続(9月、10月、12月)利下げを行うことが確実視されており、年末までに翌日物金利は3.75%に達するとの予測が織り込まれている。

今月4日に開かれるカナダ中銀政策金利決定会合では、金利・経済政策見通しに変化があるに注目。また6日の8月雇用統計や17日の消費者物価指数(CPI)にも注目が集まる。

一方、FRBもいよいよ9月に利下げ開始に踏み切ると見られている。利下げ幅に関してはデータ次第との姿勢が示されており、17-18日のFOMCの前に発表となる6日の米8月雇用統計や11日の米8月消費者物価指数(CPI)の結果次第では市場観測が大きく変化する可能性もあるので注意したい。FRBの利下げ幅が0.50%となり、米加金利差が一挙に縮小されれば、USDドル安の流れも加速すると予測する。引き続き中東やウクライナ情勢にも注意。また、11月の米大統領選が近づくにつれ、米政治動向が相場にも影響をあると思われ、不透明感が強くなりそうです。今月USD/CADは1.3200-1.3700での推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に伝わる怖い話』

トロントにあるディスティラリー地区(The Distillery Historic District)は、1832年に設立された小さな蒸留所から始まり、一時はその地域全体が産業の中心となるほど栄えていました。20世紀の終わり頃になると、企業は閉店したり、その地域から撤退し始め、蒸留所地区は廃墟と化してしまいました。しかしビクトリア様式の建物の状態が良かったこともあり、再開発され、今はおしゃれな店やレストラン、アートギャラリーが立ち並び、映画撮影の場所にも使われる人気観光スポットになっています。

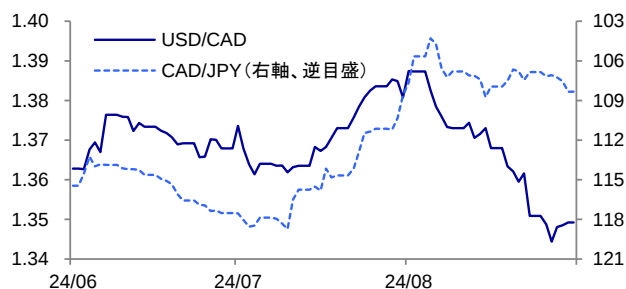
そして、この場所は長い間トロントの心霊スポットとしても良く知られており、蒸留工場の共同所有者であったジェームス・ワーツが今も敷地内を歩き回っていると伝えられています。ワーツは1834年に妻が出産時に亡くなると、風車の近くの井戸に身を投げて命を絶ったそうです。ワーツの亡霊は多くの人たちに目撃されており、ドアを開けたり、照明を点滅させたりして訪問者を驚かせることがあると言われています。

また、敷地内にあるレストランのスタッフは、ワインラックからボトルが突然飛び出し、その後に割れることなく、ぐらつきもせずにバーカウンターの上に落ちたのを目撃しています。また別の従業員は、同じ場所で首を吊っている男性の姿を見たとの報告をしており、ワーツだけではなく他にも幽霊仲間がいるらしいです。

ガイドによる怖い話を聞きながらセグウェイで幽霊スポットを探索する“セグウェイ・ゴーストツアー”というアクティビティもあります。心霊現象に興味がある方におすすめです。

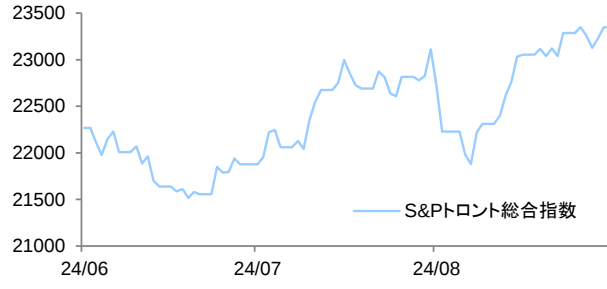
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	7月	-	47.8	49.3
8/6	貿易収支	6月	-2.04b	0.64b	-1.61b
8/9	雇用ネット変化率	7月	25.0k	-2.8k	-1.4k
8/9	失業率	7月	6.5%	6.4%	6.4%
8/12	住宅建設許可(前月比)	6月	6.0%	-13.9%	-12.7%
8/16	住宅着工件数	7月	245k	279.5k	241.6k
8/16	製造業売上高	6月	-2.6%	-2.1%	0.2%
8/20	CPI(前年比)	7月	2.5%	2.5%	2.7%
8/20	CPI季調前(前月比)	7月	0.4%	0.4%	-0.10%
8/23	小売売上高(前月比)	6月	-0.3%	-0.3%	-0.8%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1300 ~ 1360
 KRW/JPY 10.44 ~ 11.29
 JPY/KRW 8.85 ~ 9.58

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

8月のドル/ウォン相場は下落。
 7月末のFOMC会合後、米利下げ開始期待が高まり米金利が低下したことを受けて、月初のドル/ウォンは1368.0ウォンでオープンし、一時1361ウォンまで下落。しかし、2日には景気後退を懸念した株安により韓国株式市場での外国人投資家の売り越しが目立ち、1370ウォン台を回復する動きに。

翌週5日には、弱い米雇用統計を受けた米金利の急低下によりドル売りとなり、1360ウォンを割れ1355ウォン付近まで下落。しかし、景気後退懸念から株式が急速に下落すると韓国株式市場でサーキットブレーカーが発動。その後資金流出が続き同日に1375ウォン付近まで反発して引けた。6日以降もドル/ウォンは上昇基調で推移し、1380ウォン手前の高値をつけ、1370ウォン台での推移が続いた。

翌週12日は米景気に対する過度な懸念が後退し、1365ウォン付近でオープンするも、円安が進行したことを受けウォンも連れ安となり1370ウォン台を回復した。13日に発表された米PPIがインフレ鈍化を意識させる内容になると、翌14日に1360ウォン台前半まで下落。同じく15日の米CPIでも米インフレ鈍化が確認されると、翌16日にドル/ウォンは1350ウォン台まで下落した。また、外国人投資家による資金流入もウォン買いをサポートした。

翌週19日は米利下げ期待の高まりにより1351ウォン付近でオープン後、他のアジア通貨同様にドル安が進行し20ウォン以上下落。20日にかけて1325ウォン付近まで下落した。22日のBOK会合では予想通り政策金利の据え置きが決定された。また、総裁を除く6人中4人の委員は今後3か月以内の利下げ可能性を示唆したとされ、ややハト派な会合結果となった。会合後の為替相場の反応は鈍かったものの、23日にかけて1338ウォンまで戻した。

翌週26日は1324.3ウォンでオープン。ジャクソンホール会合でのパウエルFBI議長発言を受けてドル/ウォンは下落推移し、一時1319.4ウォンの安値をつけた。27日以降は中東情勢への懸念や米ハイテク企業決算への警戒から韓国株式市場での外国人投資家の売り越しが目立ち、ドル/ウォンは反発。29日15時半現在1331ウォン付近まで戻した。

■ 今月の見通し

9月のドル/ウォンは上値重い推移を予想。

8月22日のBOK会合では声明文から「金融引き締めを十分な期間維持する」という文言を削除。インフレは鈍化傾向が続いており、過半数の委員が利下げに前向きと伝わるなど、年内の利下げ開始が現実味を帯びる結果となった。

また、声明文では前回に引き続き輸出改善の流れが継続する一方、内需の回復は予想比緩慢であることが示唆された。BOKは経済見通しを更新しており、今年のGDP成長率予想を0.1%引き下げ、2.4%に下方修正するなど、景気刺激策として利下げの材料が揃いつつあることが示唆された。一方で、BOKは、家計負債の急増への懸念を示した。ソウル周辺での不動産市況は再び底入れの兆しが見えており、政府による住宅需要を刺激する政策も住宅投資の後押しをしている状況。住宅関連融資を通じて家計負債は急増しており、BOKが利下げを見送る要因となっている。年内会合は10月と11月に予定されるが、今後のBOKのコミュニケーションに注意したい。

米国はより早期、9月の利下げ開始が意識される中で、韓米金利差の縮小を通じてドル/ウォンは下落基調での推移が想定される。米国や中国といった外需をけん引している国の景気鈍化への懸念は残るも、貿易黒字の拡大を通じて実需の面からもウォン買いがサポートされる場面が想定されよう。

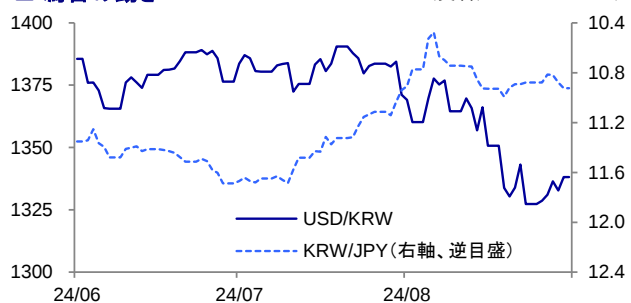
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に伝わる怖い話』

韓国では「破墓(パミョ)」というホラー映画が観客数1,000万人を超える大ヒットになっています。大金と引き換えに怪しい墓の改装を依頼された風水師と葬儀屋、そして2人のシャーマンが破墓(墓を掘り返すこと)をきっかけに解き放たれた邪悪な力によって奇妙な出来事に見舞われていくオカルト系ホラースリラーとのことですが、今秋日本でも公開が予定されているとのこと。韓国のシャーマンは「巫堂(ムーダン)」と呼ばれ、巫女と訳されることの多いのですが、日本の巫女とは異なり、悪霊祓いや先祖供養、また、豊漁や豊穡を祈る儀式を司るということで、霊能者や占い師に近いイメージとのこと。神の声を聞くという巫堂になる運命を負った少女の物語を描いたドキュメンタリー映画「時を夢見る少女」も有名とのこと。ちょっとオカルトな話になりましたが、ご興味あれば是非ご鑑賞ください。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	貿易収支	7月	5000M	3617M	7999M
8/1	輸出(前年比)	7月	18.4%	13.9%	5.1%
8/1	輸入(前年比)	7月	13.4%	10.5%	7.5%
8/2	CPI(前年比)	7月	2.5%	2.6%	2.4%
8/14	失業率	7月	2.9%	2.5%	2.8%
8/20	消費者信頼感	8月	-	100.8	103.6
8/22	BOK政策金利	8月	3.5%	3.5%	3.5%
8/27	小売売上高(前年比)	7月	-	6.3%	11.1%
8/30	鉱工業生産(前年比)	7月	7.5%	-	3.8%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 31.30 ~ 32.30
TWD/JPY 4.45 ~ 4.70

東アジア資金部台北室 久本 和樹

■ 先月の為替相場

8月のドル/台湾ドルは下落した。

月初の8月1日は32.750でオープン。前月末のFOMCにおいて、早ければ9月会合で利下げを議論、とのスタンスが示されていたことを受けて米金利が低下する中、ドル売り圧力が高まり32.60台後半まで下落。その後も、2日海外時間に発表された米7月雇用統計が市場予想対比軟調な結果となっていたことで、ドル売り圧力が一段と高まりを見せ、32.60近辺まで下落した。9日には、台湾半導体大手企業より、7月売上高が過去最高を更新と報じられたことを受けてリスクセンチメントが改善し、外国人投資家による台湾株買いが見られたことで台湾ドル買いが加速し、32.40台前半まで下落した。

月央になると、13日海外時間に発表された米7月PPIが市場予想を下回る軟調な結果となっていたことを受けて、ドル売りが進み32.20台まで下落。その後、ドル安基調を受けて輸出業者による外貨売りが見られ始める中、32.20台後半で上値重く推移した。16日には、海外時間にシカゴ連銀総裁のグールズビー氏より「必要以上に金融引き締めを続けるのは望ましくない」との発言が聞かれたことを受けてドル売りが加速し、32.00目前まで下落した。

月後半に入ると、20日海外時間に発表されたカナダ7月CPIが軟調な結果となったことを背景に海外金利が低下する中、ドル売り圧力が強まり31.90台前半まで下落。その後、23日海外時間に実施された、ジャクソンホールでのパウエル議長の講演において利下げに前向きなスタンスが示されたことを受けて、ドル売りが加速し一時約5か月振りの安値となる31.758まで下落した。

■ 今月の見通し

9月のドル/台湾ドルは上値の重い推移を見込む。

8月は米雇用、物価指標に落ち着きが見られ始める中、米中銀主要メンバーからも金融引き締めの撤廃に向けて前向きな発言が聞かれたことから、9月以降のFOMCにおける利下げ期待が台頭。米金利が大幅に低下する中、グローバルにドル売り圧力が高まる展開となった。加えて、台湾においてはグローバルな半導体需要の回復を背景にリスクセンチメントが改善する中、台湾ドル買い圧力が優勢な展開となり、ドル/台湾ドルは約5か月振りの安値となる31.758まで下落する展開となった。

9月のドル/台湾ドルについては、上値の重い推移を見込む。米国においては今月のFOMCにおいて利下げが予想されている一方、台湾においては、不動産価格の上昇が年率14%程まで高まる中、金融政策決定会合において引き締めのスタンスが示される可能性がある。係る中、米台金利差の縮小が進む場合には、ドル売り材料となるであろう。また、資金需給に目を向けると、台湾ドルについては、半導体需要の回復を背景としたリスクセンチメントの改善や、輸出の回復に伴う貿易収支の改善が期待される中、ドル売りが優勢となりやすいであろう。結論、ドル/台湾ドルについては上値の重い推移を見込む。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に伝わる怖い話』

「台湾史上最も怖い」と評されたホラー映画である「呪詛」という映画をご存じでしょうか。

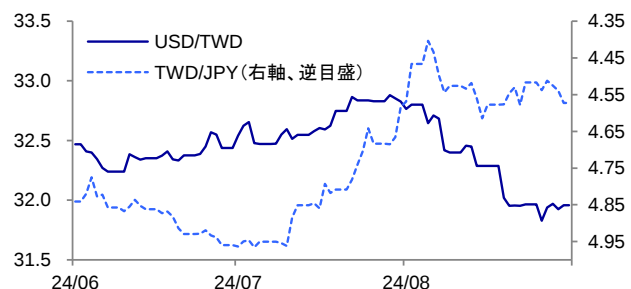
2022年に大ヒットした作品ですが、この映画は実在の要素が随所に組み込まれたオリジナルストーリーとして、大変有名です。この映画はパラノーマルアクティビティシリーズ等と同様のファウンドフットage形式で撮影されており、臨場感にあふれる内容となっております。

日本での配信がスタートすると、怖すぎるというロコミが拡散し、連日視聴ランキングのトップを獲得するほどの人気を獲得していました。

ホラー映画に興味のある方は、是非ご覧頂ければと思います。

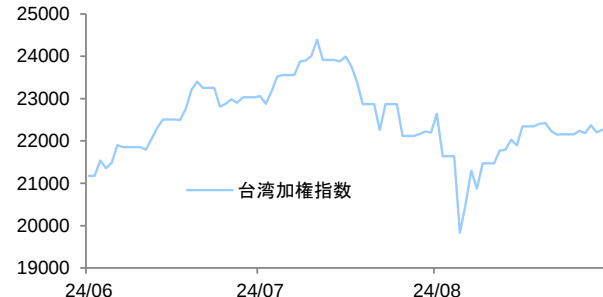
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/5	外貨準備高	7月	-	571.74B	573.30B
8/6	CPI (前年比)	7月	2.50%	2.52%	2.42%
8/8	輸出 (前年比)	7月	6.13%	3.10%	23.50%
8/8	輸入 (前年比)	7月	11.20%	16.20%	33.90%
8/8	貿易収支	7月	6.10B	4.83B	4.68B
8/20	輸出受注 (前年比)	7月	2.60%	4.80%	3.10%
8/22	失業率	7月	-	3.34%	3.34%
8/23	鉱工業生産 (前年比)	7月	-	12.30%	13.23%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7700 ~ 7.8100
HKD/JPY 17.90 ~ 19.10

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【8月の香港ドル直物相場】

香港ドル直物相場は軟調な米7月雇用統計を受けた米利下げ織り込みの拡大を背景に7.80を下回り、32か月ぶりの香港ドル高水準である7.77をつけた。20年3月に新型コロナウイルスの感染拡大を受けて米国連邦準備制度理事会（FRB）が大幅な利下げを行った後、香港ドル直物相場は取引バンドの下限である7.75まで上昇したが、それを想起させる動きだった。8月後半にはジャクソンホール会合にてパウエル議長が「金融政策の調整の時が来た」と発言し9月会合での利下げを示唆したが、香港ドル相場は落ちつきを戻しており、足元は7.80近辺にて推移している。また、足許は香港上場の中国本土企業の配当金支払やハンセン株指数の上昇が香港ドル直物相場を下支えしている。中国本土投資家によるストックコネクト（中国本土市場との株式相互取引制度）を通じた資金流入が4,500億香港ドルを上回り年初来高値を更新する等、中国投資家による香港への旺盛な投資意欲が伺えるものの、8月末にかけて配当金支払が一巡すると、香港ドルに対する短期資金需要が一服し、翌日物のフォワードポイントを押下げた。経済指標に目を向けると、香港域内の7月小売売上高は4か月連続で下落しており、域内への外国人旅行者や中国本土からの越境消費の回復の遅れが反映された結果となった。一方で香港域内7月消費者物価指数は前年比+1.5%から+2.5%まで急上昇しており、一時的な景気対策の効果差を差し引いた基調的な消費者物価指数も前回の前年比+1.0%から+1.2%に上昇した。

【8月の香港ドル金利市場】

香港ドルHIBORはカーブ全体で低下した。軟調な米7月雇用統計を受けてFRBによる9月利下げ期待が進展し、HIBORは1か月物が4.0%、3か月物は4.3%近辺にて推移し、それぞれ50bp、30bp程度低下した。米経済に対する見通しの回復に伴い米ドルSOFRの低下ペースは鈍化し、HIBORとSOFRの金利差が拡大した。香港の弱気な経済成長見通しや低調な不動産市場を背景に資金需要が低迷している事も香港ドル金利の重石となっている。直物相場が取引バンド下限まで上昇せず、HKMAによる為替介入が実施されなかったため、アグリゲートバランスは448億香港ドル近辺にて据え置かれている。HKMAによる貸出制度（ディスカウント・ウィンドウ）の利用減少が示すように、香港ドルの流動性は安定している。香港ドルスワップ金利はFRBによる利下げ織り込みの更なる進展に伴い、金利低下予想を織り込みながら低下した。香港ドルキャリー（3年物スワップ金利払い vs 3か月物HIBOR受け）は+100bpを超える水準となっている。

■ 今月の見通し

【9月の香港ドル直物相場】

9月の香港ドル直物相場は7.80近辺での推移を予想。足元の米国経済状況を踏まえると、FRBによる急激なペースでの利下げは想定しづらい。段階的な利下げの場合、即座に香港ドルが取引バンド下限の7.75近辺まで上昇する可能性は低いだろう。市場のボラティリティが低下した場合は、市場参加者が米ドル買い香港ドル売りのキャリートレードを再構築する可能性もある。加えて、中国本土投資家によるストックコネクトを通じた資金流入は好調であるものの、外国人投資家が香港株式や不動産を敬遠していることから、香港ドルへの需要が弱含む可能性もある。従って、FRBが9月会合にて利下げを実施したとしても、香港ドル直物相場を大きく押し上げる材料にはならないと考えている。

【9月の香港ドル金利市場】

米ドルベッグ制のもと、香港ドル金利はFRBの利下げサイクル入りに伴い、低下することが見込まれる。香港経済への弱気な見通しや不動産市場の低迷を背景に域内の香港ドル資金需要は低調であり、香港ドル金利が米金利を下回る状態が続いている。HKMAの中小企業向け融資緩和策は、香港域内経済に対してある程度の安心感をもたらす可能性があるが、低調な資金需要環境まで変える可能性は低い。また、四半期末における香港ドルの季節性資金需要は香港ドル金利を押し上げる可能性があるが、潤沢な香港ドルの流動性を鑑みると、金利の押し上げ効果は限定的となる見通しだ。FRBが利下げペースを加速させない限り、アグリゲートバランスの減少は見込まれず、香港株式市場に対する見通しも冴えない中、活発なIPOに伴う金利押し上げ効果も大きくは期待できないだろう。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地に伝わる怖い話』

ハイストリート・ゴースト・ハウス

香港の西營盤(Sai Ying Pun)にあるハイストリート・ゴースト・ハウスは昔から心霊現象に関する噂が絶えない場所です。19世紀後半にヨーロッパ人看護師の宿舎として建設されましたが、その後、心療病院として使われるようになりました。多くの患者が病院内で自殺を図ったと言われており、更に第二次世界大戦中に旧日本軍に占領された際には尋問の場所として使われるようになったことから、この場所は幽霊が出ると噂されるようになりました。観光客や地元の人々の中には幽霊を目撃したり、謎の足音、廊下に響き渡る不気味な泣き声を聞いたりした人もいます。一番怖い話としては、首のない幽霊が廊下を彷徨っているというもので、この建物の恐ろしい過去を思い起こさせます。現在は改装され、コミュニティーセンターとして再利用されているにも関わらず、そのような都市伝説とともに人々に恐れ、ある意味で親しまれている場所となっています。

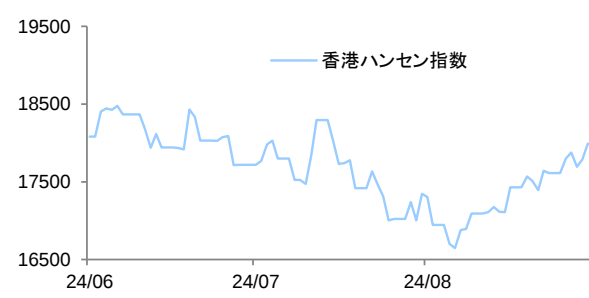
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/31	GDP (前年比)	2Q A	2.7%	3.3%	2.7%
8/1	小売売上高 (価額, 前年比)	6月	-11.8%	-9.7%	-11.5%
8/5	S&P Global Hong Kong PMI	7月	-	49.5	48.2
8/7	外貨準備高	7月	-	\$419.3b	\$416.3b
8/16	GDP (前年比)	2Q F	3.3%	3.3%	3.3%
8/16	失業率 (季調済)	7月	3.0%	3.0%	3.0%
8/20	CPIコンボジット (前年比)	7月	1.6%	2.5%	1.5%
8/27	輸出 (前年比)	7月	11.0%	13.1%	10.7%
8/27	輸入 (前年比)	7月	10.4%	9.9%	9.0%
8/27	貿易収支 (HKD)	7月	-28.7b	-21.8b	-55.7b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 7.0000 ~ 7.1800
CNY/JPY 19.22 ~ 21.43
100JPY/CNY 4.6600 ~ 5.2000

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

8月のオンショアドル人民元(USDCNY)は下落した。

ドル人民元(USDCNY)は1日、7.21台半ばでオープン。7月末の日銀金融政策決定会合での追加利上げや、弱い米7月雇用統計によるFOMCでの米利下げ観測の高まりを受けたUSDJPYの急落を受け、USDCNYも連れ安の展開となって、2日には一時7.15台まで急落。5日にはリスク回避の動きが加速しグローバルで株安、債券高となる中で一時7.11台前半へ下落を見せた。その後に市場が落ち着きを取り戻す中、神経質な値動きながらUSDCNYは底堅い動きが優勢となり、7日には一時7.18台後半まで反発を見せた。

13日にはPBOC基準値が年初来最元安水準での設定となった一方、米長期金利が低下、USDCNYも下落基調で推移。同日の米国時間に発表された米7月PPIが市場予想を下回った他、14日の米7月CPIが概ね市場予想通りの結果となったことを受けて、USDCNYは一時7.13台前半まで下落したが、翌15日には7.16台まで反発。同日夜間に発表された米7月小売売上高が大幅に改善したことを受け、米金利の上昇と共にドル高が進行、16日オープン後は7.17台へ上昇。

週末23日にジャクソンホール会議でのパウエルFRB議長の講演を控えて材料待ちの中、米長期金利低下やFRBの利下げ期待から、週前半はドル売りが優勢となり、21日には7.12台半ばまでドル安が進行。22日の米国時間には米経済指標の改善やFED高官の発言等を受けて米長期金利が上昇するとドル買いが進行し7.15台へ上昇を見せる場面も見られたが、ジャクソンホール会合においてパウエルFRB議長のハト派な発言を受けたドル売りの流れを受けて、26日には一時7.11台前半まで軟化。月末にかけては新規材料に欠ける中でフロー主導の動きとなり、29日には一時7.10台前半まで下値を試している。

■ 今月の見通し

9月のオンショアUSDCNYは上値の重い展開を予想する。

8月はUSDJPYの急落に連れ安となる形でUSDCNYも大きく調整する展開となった。年初以来、当局のカウンターシニカルなPBOC仲値調整により、日中レンジ上限である仲値+2%近辺に張り付いた推移を継続していたが、一旦はその状況から解放された形となっている。足元では調整局面は一巡し、9月FOMCでの利下げ局面開始に向けた思惑を背景に、米経済指標や米当局者の発言に一喜一憂する状況となりそうだ。

米政策金利については足元年末までに100bps程度の利下げを市場は織り込んでいる状況であり、9月の利下げ決定にサプライズはさほど伴わないものと推定される。USDCNYの実勢相場がPBOC仲値近辺へ戻している状況下、市場予想通りの政策変更、フォワードガイダンスの内容であれば一定程度買戻しの動きが入ることを想定しておきたいところ。

他方、8月初の急落後の値動きでは、半値程度戻した後、じりじりと上値重く推移する展開となっている。8月29日には急落後につけた安値7.1122(オンショア)を更新した。FRBの利下げ開始可能性が高まったことで、中国サイドでも元安懸念後退から利下げ等の追加的な金融緩和策に対する思惑から元安圧力がかかることも想定されるが、目先は米ドル主導の上値重い推移をメインシナリオとしたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に伝わる怖い話』

「中国 怪談」で検索してみると、中国の怪談を集めた本なども出版されているようで、四千年の歴史の中で数々の怖い話が伝えられてきたのだらうと推察します。

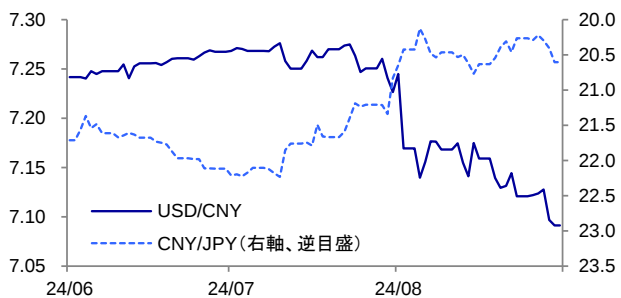
特に有名なのは清の時代の小説「聊斎志異」に書かれている「画皮」という妖怪の物語です。王(ワン)は出会った美しい女性を自身の書斎部屋に住まわせるが、数日過ぎたある日家に帰ると、鬼が人間の皮膚に絵をかいており、それが実はその美女の正体だった、というお話です。日本でもゲゲゲの鬼太郎で再現されているようです。

ただ、中国において個人的には「キョンシー」が一番怖い妖怪として記憶に残っています。小学生の頃にやったTVゲームで出てくる敵キャラのキョンシーの見た目と動きの気味悪さがなぜか心に染みついています。清代の小説「子不語」においてはキョンシーは8段階までの進化があり、空を飛べるようになったり、姿を消したりできるようになるようです。

キョンシーに関するお話は湖南省の湖西地域に多く残っているということで、私のトラウマを克服するためにも一度訪れてみようかと思っています。

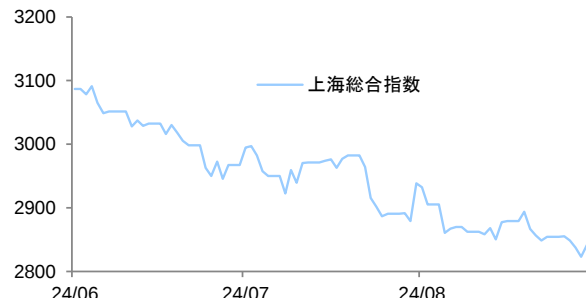
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	財新製造業PMI	7月	51.5	49.8	51.8
8/5	財新非製造業PMI	7月	51.5	52.1	51.2
8/7	貿易収支	7月	\$98.35b	\$84.65b	\$98.90b
8/9	PPI(前年比)	7月	-0.9%	-0.8%	-0.8%
8/9	CPI(前年比)	7月	0.3%	0.5%	0.2%
8/15	鉱工業生産(前年比)	7月	5.2%	5.1%	5.3%
8/15	小売売上高(前年比)	7月	2.6%	2.7%	2.0%
8/15	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	7月	3.9%	3.6%	3.9%
8/20	LPR1年物	-	3.35%	3.35%	3.35%
8/20	LPR5年物	-	3.85%	3.85%	3.85%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.2600 ~ 1.3300
SGD/JPY 106.00 ~ 114.00

アジア・オセアニア資金部 松本 彩花

■ 先月の為替相場

先月はSGD高が進行。月初USD/SGDは1.33台半ばでオープン。2日発表の米7月雇用統計が雇用者数・失業率ともに市場予想を下回る結果となると、ドル売りが優勢となりUSD/SGDは1.32台半ばまで急落。週明け5日には、前週のドル売りの流れを引継ぎ一時1.31台半ばまで下落する場面も見られたが、その後はドル売りの一服や新規材料待ちの状況となったことから、1.32台半ば付近での小幅な値動きとなった。

13日、米7月PPIの結果が予想を下回ったことを受け、米金利低下と共にUSD/SGDも水準を切り下げる展開となり、1.31台後半まで下落。翌14日、米7月CPIは前年比+2.9%と市場予想通りの結果となったものの、約3年ぶりに3%割れの水準となり米国のインフレが着実に鈍化していることが示されると、利下げ観測の高まりからドル売りの流れが一段と加速。USD/SGDは1.31台半ばをつけた。その後、15日発表の米7月小売売上高や米新規失業保険申請件数の良好な内容を受け、一時ドルが持ち直す場面も見られたが、長くは続かず。FRB高官によるハト派発言や米金利低下と共にUSD/SGDも徐々に水準を切り下げ、20日には1.30台前半をつけた。

22日、米8月非製造業PMIの結果が市場予想を上回ったことを受けUSD/SGDは1.31台前半まで持ち直したが、翌23日ジャクソンホール会議においてパウエル議長より「金融政策について調整する時が来た」との発言があったことから、再びドルが下落する展開に。尚、23日にはシンガポールCPIの発表があり、総合指数は前年比+2.4%と前回対比鈍化する結果となったものの、相場への影響は限定的。パウエル議長発言を受けUSD/SGDは心理的節目である1.30に迫ったが、その後月末にかけては特段新規材料がない中で、相場の方向感乏しく、1.30台前半での小幅な値動きに終始した。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場は、SGD高方向に水準を切り下げる展開を予想。先月はパウエル議長をはじめとしたFRB当局者によるハト派的な発言が目立っていたこと等もあり、利下げ観測の高まりと共にUSD/SGDも下落する展開となったが、今月も同様の流れとなると考える。

米国においては今月FOMC開催が予定されているが、ジャクソンホール会議にてパウエル議長より利下げ宣言とも解釈できる発言があったことから利下げ自体は概ね確実視されている。よって、利下げ幅やドットチャート、パウエル議長発言を踏まえ為替相場が動くことが想定されるが、インフレ圧力の鈍化が足元数か月のデータから確認できていることや、米労働環境も減速が示されている状況下、金融政策に対してはハト派的なスタンスが示される可能性が高いと考える。米経済指標についても足元軟調な結果が目立っていることを勘案すると、積極的なドル買いには繋がりがづらい状況が継続となるか。

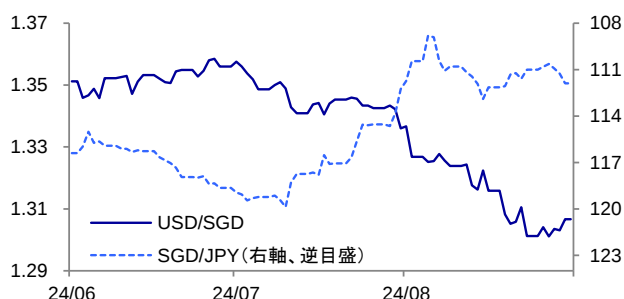
一方で、シンガポールにおいては7月総合CPIが前年比+2.4%、コアCPIが前年比+2.5%と共に前回対比減速、特にコアCPIについては約2年ぶりの低水準となった。一部エコノミストからはMASが金融緩和を検討する余地ができたとの見方が示されているものの、MASは前回会合において国内労働コストが再加速する可能性等を踏まえるとインフレ再燃リスクがあるとの見解を示し、金融緩和については慎重姿勢を堅持。また、先月はシンガポールの第2四半期GDP(確報値)の発表があったが、前年比+2.9%と速報値からの変更はなし。貿易産業省は2024年度の経済成長予測を従来の1.0-3.0%から2.0-3.0%に上方修正し、総じて年内の外需見通しは底堅いとの見解を示した。よって、シンガポールにおいてはインフレ鈍化が確認できているものの、経済状況は底堅く次回10月会合で政策変更の可能性は高くないと考える。USD/SGD相場においては上述の通り、ドル売りを背景として水準を切り下げる展開を予想しているものの、下値ではドル買いが強まる可能性もあるため相場が上下動する展開には警戒が必要。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に伝わる怖い話』
シンガポールで有名な怖い話としては、ウビン島に出る少女の霊、拷問された霊が出ると言われるChangi Hospitalなどの心霊スポットなどが有名ですが、折角なので私が聞いた怖い話をご紹介します。(上記の話が気になった方は検索してみてください。Wikipediaのページなどもあります。)あらゆるものに罰金が課せられることでも有名な罰金大国シンガポール。言い換えれば、あらゆるものが政府によって管理されているということ。そんな高度に国民が管理されているシンガポール、政府が天候まで管理しているという説が。シンガポール独立記念日、この日は屋外でパレードなどが催される為、当日は雨が降らないように数日前から上空に雨を降らす薬剤を撒いて事前に雨雲を消すという噂が有ります。この話はシンガポール在住歴の長い知人に教えてもらったのですが、私としては「漫画One Pieceのアラバスタ編でもあるまいし、」と信じていませんでした。ただ、その方が仰るには薬剤によって人工的に降らされた雨には当然、人体に有害な成分が入っている、シンガポールの雨には絶対にあたってはいけなと。。。ただ、具体的にどのように人体に有害なのかについては、その方は中々言おうとしません。下手に政府に聞かれると消されてしまうのでしょうか、、、徐々に空恐ろしくなってくる私。それでも、しつこく尋ねていると、その方は周りを見渡し誰も見ていないことを確認すると、無言のままスッと右手を頭へ。そして小声で一言、「毛え、抜けんねん・・・」。その方のお世辞にも多いとは言えない毛量と真剣なまなざしを目の前にし、私は恐怖で凍りつきました。清潔・安全なシンガポールの裏を垣間見た気がします。皆様もシンガポールへお越しの際は雨に十分お気を付けてください。(アジア・オセアニア資金部 綱島)

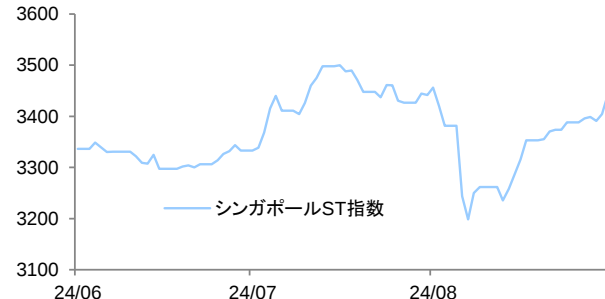
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/5	小売売上高(前年比)	6月	3.8%	-0.6%	2.2%
8/13	GDP確報値(前年比)	2Q	2.7%	2.9%	2.9%
8/16	非石油輸出(前年比)	7月	1.2%	15.7%	-8.7%
8/23	CPI(前年比)	7月	2.5%	2.4%	2.4%
8/26	鉱工業生産(前年比)	7月	0.2%	1.8%	-3.9%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 33.50 ~ 35.00
THB/JPY 4.20 ~ 4.35

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 リ チョンユエ

■ 先月の為替相場

8月のドルバーツは下落。
35バーツ台半ばの水準で月初の取引を開始。日本株が歴史的な暴落となり、グローバルな株安を引き起こした中で、リスクオフムードが強まり、ドル売り優勢の地合いに。2日に米7月雇用統計の結果が総じて軟調なものであることが確認されると、ドル売りが加速し、5日にかけてドルバーツは一段と下落したが、その後は反発を見せた。7日にタイの最大野党である前進党の解党処分や、タイ7月CPIが予想を上回ったことが確認されるも、影響は限定的。その後ドルバーツは35バーツ台前半で上値重く推移。

中旬、13日に米7月PPIは市場予想を下回ったと確認されると、ドルが売られ、節目の35バーツを割り込んだ。14日にタイ憲法裁判所がセター首相へ解任命令とのヘッドラインを受けて、政治不安から一時35バーツ台前半まで上昇したが、その後は反落。同日に米7月CPIがおおよそ予想通りの内容になり、15日に米7月小売売上高と新規失業保険申請件数が予想対比良好な結果となったが、ドルバーツは35バーツちょうどから前半付近で継続推移。16日にタイ貢献党ペートンタン党首が新首相に選出されるも、市場の反応は薄い。その後は米長期金利の続落とともに、ドルバーツは再び35バーツを割り込む展開となった。

下旬、アジア通貨が対ドルで堅調な推移を見せる中で、ドルバーツは34バーツ台前半まで下落。21日にタイ中銀が政策金利の据え置きを決定するも、予想通りの結果となったため、影響は限定的。23日のジャクソンホール会議を前に米利下げへの期待感からドルバーツは続落。パウエルFRB議長の9月利下げをほぼ確実視するとの発言が確認されると、市場は米金利低下、ドル売りで反応。ドルバーツも下落幅を拡大させ、34バーツを割り込む場面を見せた。しかしその勢いは長続きせず、月末は34バーツちょうど付近でのみ合い推移が続いている。

■ 今月の見通し

9月もドル安基調が続くそうだが、ドルバーツの下値は限定的と考える。
注目されていたジャクソンホール会議でのパウエルFRB議長の講演にて、9月FOMCでの利下げをほぼ確実視する発言が確認され、相場はドル売りの展開となったが、会議前に9月利下げは市場でほぼ織り込まれていたため、短期的にドル売りの行き過ぎ感がある。これから発表される米経済指標の結果を踏まえつつ、戻り余地があると考え。

タイ国内の政局は引き続きバーツ相場のマイナス要因と見ている。前首相の解任は国内でもサプライズとして受け止められ、新首相が選出されたことで懸念されていた連立政権内の分断は起こらなかったが、昨年5月に実施された総選挙後に、新政権が発足するまで3か月以上かかったことで予算執行が遅れ、経済が停滞する一因となった。今後も新政権樹立に時間を要することが見込まれ、政局不安が長引くことの経済への影響が懸念される。また、タイ憲法裁判所は「論理規定違反」という曖昧な理由で前首相を解任出来たため、司法の政治介入は投資家心理を冷やす要因になると考える。

中銀の政策面では、8月のMPC声明文では今後の金融政策の手がかりとなる新たな材料は示されなかったが、首相交代による影響、特に前セター政権の看板政策であった「デジタルウォレット」の行方は焦点。新政権は同政策を引き継ぐが、状況に応じて内容の調整や、低所得者のみへの現金給付に置き換わるとの報道がある。もし大幅減額されれば、財源不足と公的債務への圧力が和らぎ、インフレ上昇懸念が弱まるため、中銀が利下げへ動き出す可能性が高まっていくが、次回のMPCは10月16日であり、9月FOMCの結果を確認した上での開催となるため、この間に急速なスタンス転換の可能性が低いと考える。

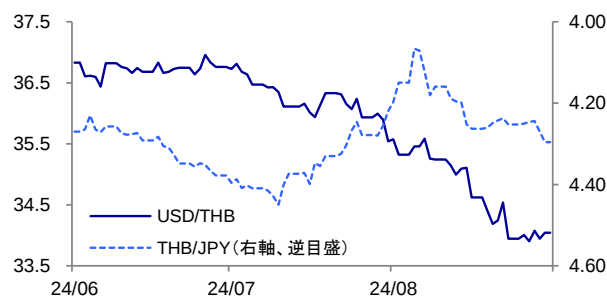
以上を踏まえると、トレンドとしてドル安が続くそうだが、ドルバーツの下値は限定的なものとなることを想定している。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に伝わる怖い話』
「メー・ナーク(MaeNak)」というタイ人なら誰でも知っている有名な怪談話があります。
ブラカノンの村に住む村長の娘ナークは、身分の低い庭師のマークと恋に落ち、家族の猛反対を突っぱねて駆け落ちした。その後、徴兵されマークが戦争に行っている最中、ナークは難産のためお腹の赤ちゃんと共に死んでしまったが、夫への愛情と未練からナークは幽霊になり、兵役を終えたマークと再び暮らし始めた。ナークの死を知る周囲の人々は繰り返しマークに忠告するも、当の本人は耳を貸そうとしなかった。しかしある日、落ちた杵を取ろうとしたナークの手がビヨーンと伸びる瞬間を偶然に見たマークが驚き、お寺に駆け込み、お坊さんに助けを要請した。それを知ったナークがついに悪霊になり、人々を手当たり次第に呪い殺した。その時、功名な僧侶が現れ、悪霊になったナークを退治した。
メー・ナークの物語は2013年に「愛しのゴースト(PeeMak)」という映画として制作され、タイ歴代興行収入1位を記録しています。ホラーというよりコメディ要素が強め、世界で最も美しい顔トップ100にも選出されたタイの人気女優ダビカ(MaiDavika)さんがナーク役に出演。私の母国である中国でも話題になったことが記憶に残っています。ご興味があったら、ぜひ見てみてください。

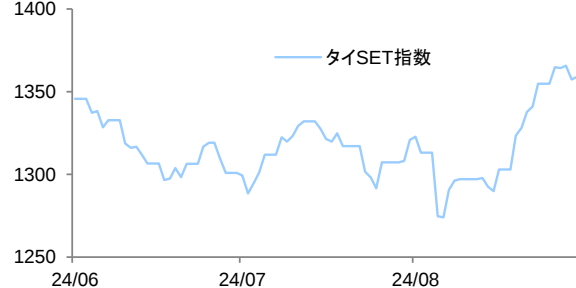
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/6	消費者信頼感指数	7月	-	51.3	52.6
8/7	CPI YoY	7月	0.70%	0.83%	0.62%
8/7	CPI コア YoY	7月	0.40%	0.52%	0.36%
8/19	GDP YoY	2Q	2.2%	2.3%	1.6%
8/21	タイ中銀政策金利	-	2.50%	2.50%	2.50%
8/27	自動車販売台数	7月	-	46,394	47,662

(資料) ブルームバーク

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.23	～	4.40
	MYR/JPY	33.00	～	34.30
	JPY/MYR	2.91	～	3.03

マレーシアみずほ銀行 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

8月のUSD/MYRは2023年2月以来の水準までドル安・リング高が進んだ。月高値となる4.59近辺で取引を開始。ハト派なFOMCと国内輸出勢からの実需のドル売りを受けて、2日には米7月雇用統計を同日夜間に控えながらも大台の4.5を割り込んだ。注目の米7月雇用統計はヘッドライン、平均時給の伸び共に予想に届かず、失業率が上昇したため、5日のオープン後はドル安となるも、米景気の減速懸念から株安が進むと次第に反発。7日には週高値となる4.51台まで上昇。そのまま下値堅く越えたと見られたが、週末には馬経済に対する楽観的な見方から前週の動きを踏襲するようにクローズに向け4.42台まで水準を落とした。

12日週は米PPIやCPIを控えていたためかリング高水準から一時反発。米軍が空母を中東へ派遣したとのヘッドラインも入り、地政学リスクから13日には4.47近辺まで上昇。但し、米7月PPIが予想に届かず、Fed高官からもハト派な発言が出ると、米金利低下と共に4.42台へ下落。注目の米7月CPIは予想に届かずも、中東情勢の不安感後退や米7月小売売上高等が予想比良好で底堅く推移。16日発表の馬2QGDP確報値は速報値を更に上回る+5.9%を記録したが、米金利が上昇したためMYR買いは限定的だった。19日、馬7月貿易統計が発表され、輸出・輸入共に伸びが加速。馬経済の先行きへの期待感が高まり、4.38台までリング高が進んだ。その後も米雇用統計の下方修正等を受け、ドル売りが優勢となり、一時4.35に迫って2023年2月以来のリング高水準を付けたが、節目近辺での下値は堅く、直ぐに押し返された。

ジャクソンホール会議でのパウエル議長講演は9月利下げを示唆する内容で7月FOMC議事録とも整合性があり、月末週のUSD/MYRは4.35近辺で上値の重い展開が継続。26日以降は幾度か4.35を割り込む動きとなり、29日には海外勢からのマレーシアへの投資フローを背景にリング高に弾みがつく恰好で終盤には4.31台を示し、年初来安値を大きく更新した。

■ 今月の見通し

9月のUSD/MYR相場は引き続き下値を試す展開が続くと予想。

8月はリング高要因及びドル安要因と双方向からの支持を受けてMYRは7月末対比で6.25%も対ドルで上昇しており、主要アジア通貨の中では対ドル上昇率で最強通貨の地位にある。(本稿執筆時点)

MYRサイドから見れば、2024年1Qおよび2Q前半とは明らかにマレーシアに対するセンチメントが変わっている上、各種経済指標がMYR高の裏付けになっている。良好なGDP成長はGDPの約2/3を占める個人消費に支えられており、堅調な個人消費がマレーシアの製造業およびサービス業を支えるという好循環を生み出していて、同国政府は2024年のGDP成長率を4～5%と見ているが、上半期の単純平均で既に政府見通しの上限を僅かに上回っている状況。国内物価は低位安定していて、経済成長も軌道に乗っているため、2024年後半もマレーシア経済は堅調な伸びが期待される。更に海外投資家勢からのフローも入りやすく、リング買いが当面続くだろう。

USDサイドをに視線を振ると、9月FOMCでのFF金利引き下げは既に共通認識。パウエルFRB議長の発言は1年前の同シンポジウムでのものとは全く違っていて、既に米金融政策は利下げフェーズに突入していると捉えられても遜色ないようなものであった。加えて、7月FOMC議事録の内容的にもメンバーの大多数が経済指標がほぼ予想通りなら、次回9月の会合での利下げが適切という見解を示していることもUSDが軟調に推移する要因となるだろう。

ただし、これだけ早いペースでUSD/MYRが下落しているため、巻き戻しの動きが入った場合は他通貨以上にその振れ幅が大きくなる可能性が考えられる。イベント発生時にはジャンプしやすいことに留意しつつ、MYR高をメインシナリオとして見ておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に伝わる怖い話』

マレーシアは多民族国家であるため、お化けや幽霊といった怖い話にまつわる存在も多種多様です。今月のお題は怖い話ですが、同僚から色々とお化けや幽霊に関する話を教えてもらったため、それについて披露させていただきます。

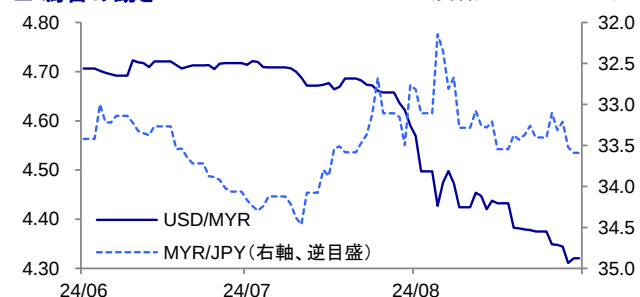
お化けや幽霊はマレー語だと「Hantu(ハントウ)」と言います。マレー系の人々の間で有名はハントウはPontianak(ボンティアナック)という女性の幽霊だそうです。髪の毛の長い色白の妊婦の吸血鬼だと言われており、男性が嫌いという言い伝えがあります。幼少期に怖い吸血鬼映画を見てしまって以降、未だにふと思い出してしまうことがある私としては絶対会いたくない存在です。(但し、そういう感覚は幸いなことに一切持ち合わせていないので心配無用ですが、、、)

中華系の怖い存在だと「キョンシー」では？という回答がありましたが、資金課の同僚曰くキョンシーは映画のイメージが先行しているとのこと。キョンシーよりも霊界の門が開いて靈魂が下界をさまようと言われている鬼月(旧暦7月(現在の8月))の方が多くの中華系の方に意識されるとのこと。鬼月のちょうど中間にあたる中元節には、靈魂が最も多くさまようと言われ、子供が夜遅くまで遊んでいると中元節の鬼に攫われると言われていたとも教えてくれました。他にもインド系お化けや幽霊もいるようで多民族国家のネタの多さに関心した次第です。

但し、これをきっかけにまた思い出してしまった幼少期の記憶、これだけの長期記憶ならもって役立つ記憶だった良かったなと感じました。

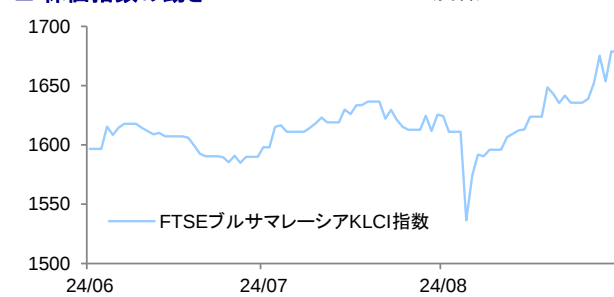
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/7	Foreign Reserves	Jul-24	-	\$114.7b	\$113.3b
8/9	Industrial Production YoY	Jun	4.2%	5.0%	2.4%
8/16	GDP YoY	2Q F	5.8%	5.9%	5.8%
8/19	Exports YoY	Jul	9.0%	12.3%	1.7%
8/19	Imports YoY	Jul	14.4%	25.4%	17.8%
8/19	Trade Balance MYR	Jul	1330.00%	6.42b	14.29b
8/22	CPI YoY	Jul	2.1%	2.0%	2.0%
8/22	Foreign Reserves	Aug-15	-	\$115.9b	\$114.7b

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 15300 ~ 15750
IDR/JPY 0.9091 ~ 0.9615
JPY/IDR 104.00 ~ 110.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 綱島 正侑記

■ 先月の為替相場

8月のルピアは対ドルで大幅に上昇した。

1日、前日海外時間に行われたFOMC会合、およびパウエルFRB議長の見解がハト派的と受け止められドルルピアは前日対ドル安・ルピア高水準となる16200台前半で取引を開始した。この日に発表されたインドネシア7月の消費者物価指数(CPI)の結果は前年同月比+2.13%となり、市場予想を下回る結果。発表後こそ16200台半ばまでルピアが売られる局面も見られたが、その後は落ち着いて値動きとなり、翌2日にかけ16200台半ばを中心としたレンジで推移した。5日に発表されたインドネシア4～6月期GDPは前年同期比+5.05%となり、当局および市場の予想とほぼ一致し、市場の反応も限定的となった。その後はドル安の流れに加え、海外投資家からの資金流入等もあったとみられる中でルピア買いが優勢となり週後半にかけルピアは対ドルで上昇幅を拡大させ8日には一時15800台後半を付けた。しかしながら同水準ではルピア売り意欲も強く、翌週13日にかけ15900近辺でもみ合い推移となった。13日、海外時間に発表された米7月生産者物価指数(PPI)の結果が市場予想を下回る結果となったこと受け、ドル売りの流れが強まると、翌14日のドルルピアは15700近辺までドル安が進展した。また、インドネシアの来年度予算案が提出され、赤字幅が事前の見通し対比小幅なものとなったこともルピア高の追い風となる中、翌週19日にはルピアは15400台半ばまで上昇幅を拡大させた。21日に行われたインドネシア中銀会合では、大方の予想通り政策金利の据え置きが決定された。会合後のペリー総裁会見では「10～12月期に利下げを検討」と7月会合時の見方を維持しており、足許でのルピア上昇を受け利下げが前倒しとなると予想していた向きをけん制した格好となった。22日には、インドネシアで大規模デモが行われ、インドネシア政治を巡る不透明感が増したことを受けルピアは15600台前半まで反落となったが、23日海外時間にパウエル議長のジャクソンホールでの講演において「政策を調整する時が来た」と発言したこと受け、9月利下げが確実視される中、ドル安の流れが再燃。26日には一時15300近辺までルピア高が進展した。その後はドル売りに調整が入り15500台まで値を戻す局面も見られたが、月末にかけては15400近辺で推移しクローズした。

■ 今月の見通し

9月のルピアは軟調な値動きを予想。

インドネシア中銀は8月会合において政策金利の据え置きを決定。FRBが9月に利下げに着手することが濃厚と見込まれる中においてもインドネシアの利下げについては10～12月期がターゲットとなるとの見通しを維持しており、米国が実際に利下げを行った後もルピアが安定して推移することを確認したいとの思惑もあるか。米国対比、インドネシアの利下げペースが緩やかなものになるのであれば、それ自体はルピア上昇の材料となり得るものと考えられる。また、インドネシアの高い金利水準は海外投資家から魅力的だとも考えられ、証券投資を通じた資金流入もルピアの安定に引続き寄与するものと予想する。

一方で、米国では9月FOMCにおいて利下げすることが確実視されているが、利下げ幅については意見が割れている状況。一部で▲0.5%の利下げを織込む向きもあり、利下げ幅が▲0.25%となった場合はドル高で反応すると見込まれる。パウエル議長が注視するとした労働市場の状況は失業率が4.3%となっているが、決して高すぎる水準ではないとの印象を拭えない。加えて7月FOMC会合後のパウエル議長会見において「初回▲0.5%の利下げは現時点で考えていない」とのコメントもある中、9月会合の利下げ幅については▲0.25%をメインシナリオとして考えたい。9月会合での利下げ幅が▲0.25%となった場合、織込みすぎた利下げ幅を修正し、ドル高に動くことが予想される。

インドネシアの利下げスケジュール、証券投資を経由した資金流入など、ルピアにとっての好材料はあるものの、米利下げ動向を受けルピア安が進展する展開を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に伝わる怖い話』

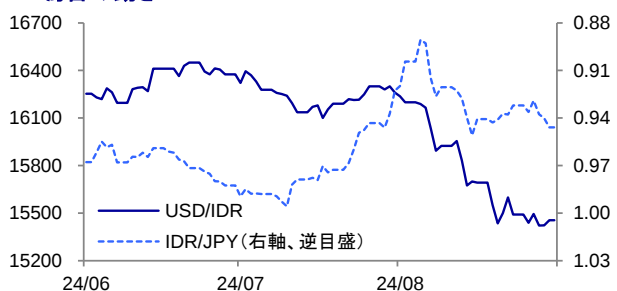
当地には多くの民族と文化があり、それぞれの地域の文化には独自の都市伝説と超自然的な世界があります。そしてもちろん、多くの種類の幽霊がいます。ポチョンは当地で有名な幽霊の一つです。死者の魂が埋葬服に閉じ込められたものだと言われています。埋葬服は死者の体を包むために使われます。家族がシャワーを浴びて体をきれいにした後、カファンと呼ばれる白い布で死体を包み、頭頂部、首、足の下で縛ります。ポチョンは緑色の顔に空っぽの目をしていられると言われています。別の描写では、ポチョンは「普通」の顔をしており、穴があいているか、空洞の目が閉じた綿毛で、顔は青白くなっています。幽霊の存在を信じる人々は、ポチョンは墓が閉じられる前に曲がりくねった絆を開いた忘れられた死者への「抗議」の一種であると考えています。映画ではポチョンがジャンプする動きがよく描かれていますが、神話ではポチョンが宙を舞う動きさえ述べられています。

先住民の信仰によると、死者の魂は死後40日間地球に留まります。そのために、家族は最初の7日間、14日目と最終的に40日目に儀式を主催します。死者を埋葬した人々は、頭のカファンの紐を緩めるのを忘れることがよくあります。そうすると、死体が墓から飛び出し、人々にカファンの紐を緩めるように警告すると言われています。絆が解けると魂は地上を去り、二度と姿を現さなくなります。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	CPI(前年同月比)	7月	2.37%	2.13%	2.51%
8/5	GDP(前年比)	Q2	5.00%	5.05%	5.11%
8/15	貿易収支(USD M)	7月	2,474	472	2,395
8/15	輸出(前年比)	7月	3.84%	6.46%	1.18%
8/15	輸入(前年比)	7月	-1.13%	11.07%	7.58%
8/21	BI 金利	-	6.25%	6.25%	6.25%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 55.50 ~ 57.00
JPY/PHP 0.380 ~ 0.400

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 福田 俊輔

■ 先月の為替相場

【8月のドルペソ相場は、ほぼ一方向的に大きくペソ高に傾く】

8月初のドルペソ相場は、1米ドル＝58.32ペソで取引を開始。日米の金融政策決定会合を終え、各国で為替、株、金利の各市場の相場が大きく変化。米長期金利が大きく低下し、グローバルにドル売りが進む展開に、ドルペソ相場もペソ高へ。月初から8営業日連続でペソ高に向かい、58ペソの節目を割込むと57ペソ台前半まで下落。その間、8月6日に比7月消費者物価指数(CPI、前年比)が公表され、予想+4.1%に対して+4.4%という強めの結果。発表前までは、フィリピンの政策金利は8月に引下げが予想されていたが、急遽、冷や水を浴びせられた格好。上記結果を受けて、改めて注目度が高まったフィリピンの4～6月期GDP(前年比)は、予想と同じ+6.3%、前回公表分(+5.7%)も上方修正され+5.8%という堅調な結果。

8月中旬に入ると、比金融政策決定会合を控え、57ペソちょうど近辺を挟んだレンジで往来。金利先物市場等が未整備な当地市場において、政策金利が据置きか利下げかは発表まで非常に不透明な中、市場参加者もポジション調整を繰り返す展開。結局、▲0.25%の利下げが決定されたものの、その後のレモナ比中銀総裁の会見では、年内の再利下げを示唆。

8月下旬にかけては、ペソ高への下げ足を早め、56ペソ台前半まで下落。米ジャクソンホール会合では、各国中銀総裁、高官からの発言が相次ぐ中、米政策金利の9月引下げがほぼ確定されるようになると、グローバルなドル売りの流れにドルペソ相場も乗じてペソの下値を探る展開となった。結局、月初に月中のドル高ペソ安値となり、月末近辺で月中のドル安ペソ高値圏での推移となった。

■ 今月の見通し

【9月は、米利下げ結果と今後の金融政策方向感を見定め】

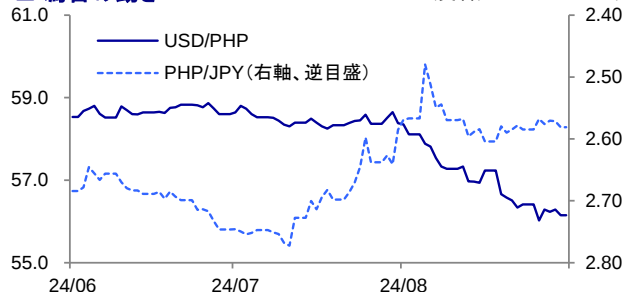
8月は、案の定、各国金融政策の方向感の違いが浮き彫りとなったが、特にアジアの株式相場を中心に大きく市場が動揺する場面も見られた。かかる中、フィリピンの株式、為替市場は他アジア各国と比べると比較的余波は小さかったものの、ドルペソ相場はペソ高に偏った展開となった。米国に先行して比中銀は利下げを決定したが、フィリピンの各種経済指標を見ても大きく崩れている印象は無い。8月の利下げ決定を逃すと、次回会合は通常10月となる為、今後の物価上昇圧力の減退予想と内需の早期喚起に向けた決定だった。

一方の米国も9月利下げが確実視されているが、下げ幅が▲0.25%なのか▲0.50%なのかは意見が割れている。9月前半は、米利下げ幅を巡り、米経済指標結果と米金利動向をにらみながら、神経質な展開が続くであろう。やや足早にペソ高に傾いた反動もあり、目先は56ペソ台を中心とした値動きとなるだろうが、米指標結果次第では一時的に55ペソ台に割込む可能性もあり得る。

9月後半にかけては、比10月金融政策決定会合での利下げ有無に関して、政府高官等の発言への注目度が高まり、ポジション調整が活性化することで、8月同様にドルペソ相場の傾きが強まる可能性がある。また、まだあまり材料視されていない米大統領選に向けた動きが、ドルペソ相場に与える影響も意識しておきたい。米比それぞれの政策金利の変更をきっかけとして、ドルペソ相場は上下いずれにも振れやすく、落ち着き所を探る展開となるであろう。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 83.20 ~ 84.10
INR/JPY 1.69 ~ 1.82

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【8月の米ドル/インドルピーは安値圏での揉み合いに終始】

83.60後半水準にて当月取引を開始。月初については、他通貨ではUSD売り圧力に伴う通貨高バイアスが鮮明となるも、インド準備銀行(RBI)からの下支えの為替介入(USD買い・INR売り)も相俟って、むしろルピー安の展開となり、最安値を更新する流れに。月央については、当該水準で横這い推移が継続し、安値圏での揉み合いに終始。月末については、実需勢からのフローおよびインド準備銀行(RBI)からの上値抑えの為替介入(USD売り・INR買い)も発動され、一部水準感を調整する等、上値の重い値動きとなるも、過度なルピー高方向への転換には至っておらず、あくまでも値幅は限定的となり、結局、83.90台でのクローズとなった(23日時点)。

SENSEXは、月初は82,000水準近傍でスタート後、世界株安の流れも受け、節目80,000水準を割り込み、79,000水準も下方にブレイクするまで急落を見せる。その後は、当該水準にて底堅い推移が継続し、月末にかけては、再び買い圧力が高まり、徐々に水準感を取り戻しつつ、再び81,000台を回復した(23日時点)。外国人投資家からのインド株への投資資金流入は、月初から売り越しが継続していたものの、資金流入の回帰が足許再び進展し始めている状況。

インド経済指標では、7月製造業/サービス業PMIは小幅に低下。6月鉱工業生産は、市場予想を下回る結果(前回数値は上方修正)。8月金融政策委員会(MPC)は、9会合連続となる政策金利据え置き(6.50%)を実施し、今回投票も4対2と、前回会合時と同票の利下げ票が入る恰好。7月消費者物価指数(CPI、前年比)は+3.54%と、前回の+5.08%から大きく低下。7月貿易収支は、赤字幅は拡大し、引き続き赤字は常態化しており、通貨として弱い立ち位置は不変。

■ 今月の見通し

【9月の米ドル/インドルピーは節目84水準目前に上値重い展開か】

9月においては、安値圏水準にて揉み合いを前提も、節目84水準目前に上値重い展開を見込む。8月は、USD売り圧力に対抗したRBIからの下支えの為替介入(USD買い・INR売り)の動きも散見され、最安値を更新。一方、過度なルピー安にならないよう、RBIからのアンダーコントロールは継続されており、節目84水準の前に、上値の重さが漂い始めていると考えておきたい。

8月MPCでは、政策金利は6.50%の据え置きとなり、前回会合時と同票の利下げ票が入っていることから、方向感としては、年後半にかけての▲25bpの利下げをメインシナリオと想定。一方、RBIからのCPI見通しの上方修正もあり、利下げ時期の後ろ倒しの可能性も懸念される。斯かる中、7月CPIは、前回対比で大きく低下する結果となり、インフレターゲット4.0%を割り込んできた恰好となるが、前年7月CPIが、天候不順に伴う急騰後のCPI対比となっており、ベース効果ありきの結果とも見受けられる。単に、数値結果だけで、利下げ時期の前倒しというよりは、ベース効果を除いたインフレ動向にて、インフレターゲット到達がなされているかを確認していくフェーズとの認識を持っておきたい。

8月は、インド株・インド債券への投資資金流入については、インド債券は引き続き堅調、インド株は、世界株安に伴う売り越しとなるも、徐々に資金回帰が始まった様相。米利下げ局面入りにて年後半にかけてルピー高方向といったメインシナリオは崩していないものの、総じてUSD売り圧力が進展する方向感には構えていない。米印双方の金融政策動向や、米大統領選挙関連のヘッドラインが徐々に垣間見える段階で、局所的な相場変動となる展開に留意しつつ、RBIからの下支えの為替介入および実需勢からのアウトフロー(インドルピー売り)に伴って、方向感はルピー安回帰という目線感で見えておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地に伝わる怖い話』

バンガロールは1,400万人の人口を擁する大都市だが、20年前には600万人程度と半分未満だった。

当行バンガロールオフィスは国際空港の近くに位置しており、開業から11年を迎えた。国際空港は16年前に市内中心地から移転したもので、当行オフィスの開業時は空港への有料道路が未整備で、通勤にも時間がかかったものだ。

空港が無かった頃のオフィス近辺は農村地帯で、ブドウや野菜の畑が広がっていた。町にはバスや長距離列車は走っていたものの、市内に通勤する人はほとんどいなかった。州間道路を一本外れるとめばしい建物もなく、夜は真っ暗だったらしい。

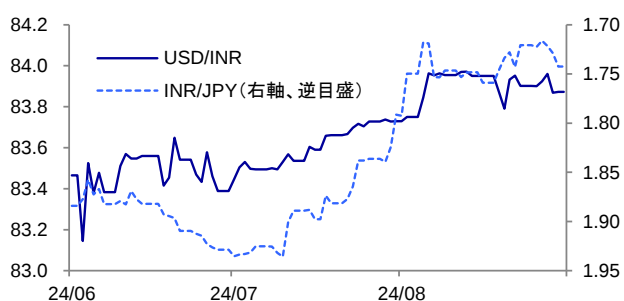
「この辺りは日が暮れたら絶対に訪れてはいけない場所だった。車で走っていると石が投げつけられることがあるが、ブレーキをかけたら終わらだ。強盗団が斧や鎌を持って襲ってくる。たった10ルピー(現在の価値で17円)を強奪するために人が襲われ、殺された」

これは社用車のドライバーに聞いた話である。暗がりから武器を持った人々が襲ってくる状況を想像してすっかり震え上がったものである。

現在はオフィスの周辺にはレストランや高層住宅ができ、不動産投資のホットスポットだ。機会があればぜひご訪問いただきたい。
(インド営業部バンガロール・木原志乃)

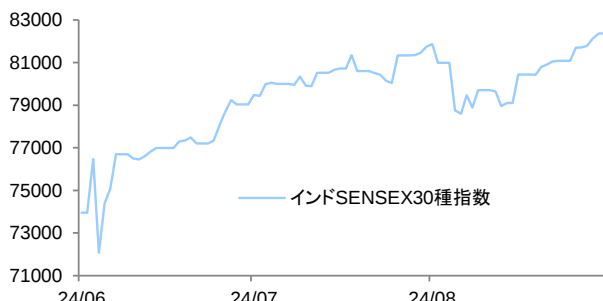
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	製造業PMI	7月	-	58.1	58.3
8/5	サービス業PMI	7月	-	60.3	60.5
8/8	政策金利	8月	6.50%	6.50%	6.50%
8/12	鉱工業生産	6月	5.40%	4.20%	6.20%
8/12	CPI	7月	3.60%	3.54%	5.08%
8/15	貿易収支(百万ドル)	7月	-21,500	-23,497	-20,977

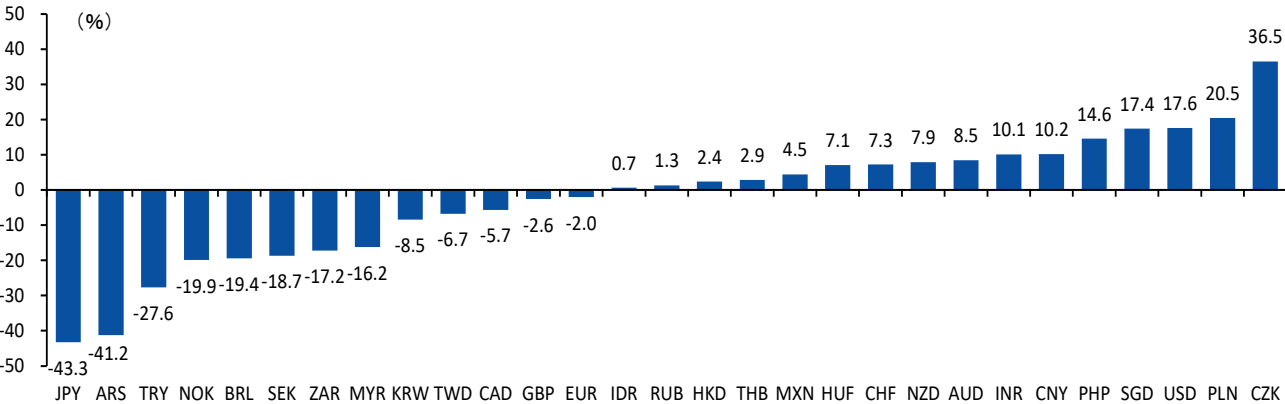
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2023年末	2024年8月末	騰落率	株式市場	2023年末	2024年8月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	37689.54	41563.08	10.3%	-
日本	USD/JPY	141.04	146.17	3.6%	日経平均株価	33464.17	38647.75	15.5%	11.4%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1039	1.1048	0.1%	ドイツDAX指数	16751.64	18906.92	12.9%	12.9%
英国	GBP/USD	1.2731	1.3127	3.1%	ロンドンFTSE100指数	7733.24	8376.63	8.3%	5.1%
豪州	AUD/USD	0.6812	0.6765	-0.7%	S&P/ASX200指数	7590.818	8091.854	6.6%	7.3%
カナダ	USD/CAD	1.3243	1.3492	1.9%	S&PTロント総合指数	20958.44	23346.18	11.4%	9.3%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	7.1	7.0913	-0.1%	上海総合	2974.935	2842.214	-4.5%	-4.3%
香港	USD/HKD	7.8115	7.7977	-0.2%	香港ハンセン	17047.39	17989.07	5.5%	5.7%
インド	USD/INR	83.2088	83.8725	0.8%	インドSENSEX30種	72240.26	82365.77	14.0%	13.1%
インドネシア	USD/IDR	15399	15455	0.4%	ジャカルタ総合	7272.797	7670.733	5.5%	5.1%
韓国	USD/KRW	1291.07	1338.17	3.6%	韓国総合株価	2655.28	2674.31	0.7%	-2.8%
マレーシア	USD/MYR	4.594	4.3205	-6.0%	ブルサマレーシアKLCI	1454.66	1678.8	15.4%	22.7%
フィリピン	USD/PHP	55.385	56.15	1.4%	フィリピン総合	6450.04	6897.54	6.9%	5.5%
シンガポール	USD/SGD	1.3203	1.3067	-1.0%	シンガポールST	3240.27	3442.93	6.3%	7.4%
台湾	USD/TWD	30.579	31.957	4.5%	台湾加権	17930.81	22268.09	24.2%	18.8%
タイ	USD/THB	34.256	34.042	-0.6%	タイSET	1415.85	1359.07	-4.0%	-3.4%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2024年7月時点)



■ 実質GDP成長率

	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2024Q1	2024Q2	2022	2023
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.6	2.2	2.1	4.9	3.4	1.4	3.0	1.9	2.5
日本*	1.7	5.2	2.4	-4.0	0.3	-2.3	3.1	1.2	1.7
ユーロ圏	1.9	1.3	0.5	0.1	0.2	0.5	0.6	3.5	0.4
英国	0.6	0.3	0.2	0.2	-0.2	0.3	0.9	4.3	0.1
豪州	2.5	2.3	1.9	2.1	1.6	1.1		3.9	2.0
カナダ*	-0.9	3.4	0.7	-0.3	0.1	1.8	2.1	3.8	1.3
エマージングアジア									
中国	2.9	4.5	6.3	4.9	5.2	5.3	4.7	3.0	5.2
香港	-4.3	2.8	1.6	4.2	4.3	2.8	3.3	-3.7	3.3
インド	4.3	6.2	8.2	8.1	8.6	7.8	6.7	9.7	7.0
インドネシア	5.0	5.0	5.2	4.9	5.0	5.1	5.1	5.3	5.1
韓国	1.1	1.1	1.0	1.4	2.1	3.3	2.3	2.7	1.4
マレーシア	7.4	5.5	2.8	3.1	2.9	4.2	5.9	8.7	3.7
フィリピン	7.1	5.8	6.3	6.0	5.5	5.8	6.3	7.6	5.5
シンガポール	2.4	0.5	0.5	1.0	2.2	3.0	2.9	3.9	1.1
台湾	-0.7	-3.5	1.4	2.2	4.8	6.6	5.1	2.6	1.3
タイ	1.3	2.6	1.8	1.4	1.7	1.6	2.3	2.5	1.9

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	23/12	24/01	24/02	24/03	24/04	24/05	24/06	24/07	2022	2023
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.7	3.7	3.9	3.8	3.9	4.0	4.1	4.3	3.6	3.6
日本	2.5	2.4	2.6	2.6	2.6	2.6	2.5	2.7	2.6	2.6
ユーロ圏	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.4	6.7	6.6
英国	3.8	4.0	4.2	4.3	4.4	4.4	4.2		3.9	4.0
豪州	3.9	4.1	3.7	3.9	4.1	4.0	4.1	4.2	3.7	3.7
カナダ	5.8	5.7	5.8	6.1	6.1	6.2	6.4	6.4	5.3	5.4
エマージングアジア										
中国										
香港	2.9	2.9	2.9	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	4.3	3.0
インドネシア			4.8						5.9	5.4
韓国	3.2	3.0	2.6	2.8	2.8	2.8	2.8	2.5	2.9	2.7
マレーシア	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3		3.8	3.4
フィリピン	3.1	4.5	3.5	3.9	4.0	4.1	3.1		5.4	4.4
シンガポール	1.8	1.9	2.0	2.0	2.1	2.0	0.0		2.1	1.9
台湾	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.7	3.5
タイ	0.8			1.0					1.3	1.0

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	23/11	23/12	24/01	24/02	24/03	24/04	24/05	24/06	24/07	2022	2023
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	3.1	3.4	3.1	3.2	3.5	3.4	3.3	3.0	2.9	8.0	4.1
日本	2.8	2.6	2.2	2.8	2.7	2.5	2.8	2.8	2.8	2.5	3.3
ユーロ圏	2.4	2.9	2.8	2.6	2.4	2.4	2.6	2.5	2.6	8.4	5.5
英国	3.9	4.0	4.0	3.4	3.2	2.3	2.0	2.0	2.2	9.1	7.3
豪州		4.1			3.6			3.8		6.6	5.6
カナダ	3.1	3.4	2.9	2.8	2.9	2.7	2.9	2.7	2.5	6.8	3.9
エマージングアジア											
中国	-0.5	-0.3	-0.8	0.7	0.1	0.3	0.3	0.2	0.5	2.0	0.2
香港	2.6	2.4	1.7	2.1	2.0	1.1	1.2	1.5	2.5	1.9	2.1
インド	5.6	5.7	5.1	5.1	4.9	4.8	4.8	5.1	3.5	6.7	5.7
インドネシア	2.9	2.8	2.6	2.8	3.1	3.0	2.8	2.5	2.1	4.2	3.7
韓国	3.3	3.2	2.8	3.1	3.1	2.9	2.7	2.4	2.6	5.1	3.6
マレーシア	1.5	1.5	1.5	1.8	1.8	1.8	2.0	2.0	2.0	3.4	2.5
フィリピン	4.1	3.9	2.8	3.4	3.7	3.8	3.9	3.7	4.4	5.8	6.0
シンガポール	3.6	3.7	2.9	3.4	2.7	2.7	3.1	2.4	2.4	6.1	4.8
台湾	2.9	2.7	1.8	3.1	2.2	1.9	2.2	2.4	2.5	3.0	2.5
タイ	-0.4	-0.8	-1.1	-0.8	-0.5	0.2	1.5	0.6	0.8	6.1	1.3

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2024Q1	2024Q2	2022	2023
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.8	-3.6	-3.4	-3.3	-3.2	-3.2		-3.9	-3.3
日本	2.0	1.6	2.1	3.1	3.6	4.2	4.4	2.0	3.6
ユーロ圏	-0.3	-0.2	0.3	1.2	1.6	2.1		-0.3	1.6
英国	-3.1	-2.1	-2.2	-2.4	-3.3	-3.3		-3.1	-3.3
豪州	0.9	1.0	0.6	0.4	0.3	-0.2		0.9	0.3
カナダ	-0.4	-0.6	-1.0	-0.9	-0.7	-0.8		-0.4	-0.7
エマージングアジア									
中国	2.6	2.4	2.3	1.8	1.5	1.2	1.2	2.5	
香港	10.2	9.0	9.4	8.8	9.2	10.8		10.2	9.2
インド	-2.4	-2.0	-1.7	-1.1	-0.9	-0.7		-2.4	-0.9
インドネシア	1.1	1.2	0.6	0.2	-0.2	-0.6	-0.6	1.0	-0.2
韓国	1.5	0.3	0.1	1.0	2.0	3.2		1.4	1.9
マレーシア	3.2	3.5	3.7	3.1	1.6	1.8	1.5	3.2	1.6
フィリピン	-4.6	-4.4	-3.3	-2.4	-2.6	-1.9		-4.4	-2.6
シンガポール	18.0	18.2	18.2	18.5	19.8	20.3	20.1	18.0	19.8
台湾	13.4	12.1	12.0	12.8	13.9	15.1	14.7	13.3	13.9
タイ	-3.2	-2.0	-0.9	1.4	1.9	1.7		-3.2	1.9

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	5.25-5.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/7/26	+25bp	2024/7/31	現状維持
日本	当座預金残高の政策金利	0.25	引き締め: 2024/3/19	-0.10	2024/7/31	+15bp	2024/7/31	+15bp
ユーロ圏	預金ファシリティレート	3.75	緩和: 2024/6/6	4.00	2024/6/6	-25bp	2024/7/18	現状維持
英国	バンク・レート	5.00	緩和: 2024/8/1	5.25	2024/8/1	-25bp	2024/8/1	-25bp
豪州	キャッシュ・レート	4.35	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/11/7	+25bp	2024/8/6	現状維持
カナダ	翌日物金利	4.50	緩和: 2024/6/5	5.00	2024/7/24	-25bp	2024/7/24	-25bp
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2024/7/22	-10bp	2024/8/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2024/8/8	現状維持
インドネシア	BI金利	6.25	引き締め: 2022/8/23	3.50	2024/4/24	+25bp	2024/8/21	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2024/8/22	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2024/7/11	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.25	緩和: 2024/8/15	6.50	2024/8/15	-25bp	2024/8/15	-25bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	2.000	引き締め: 2022/3/17	1.125	2024/3/21	+12.5bp	2024/6/13	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	2.50	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/9/27	+25bp	2024/8/21	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注) インドネシア中銀は2023年12月21日に政策金利を7日物リバースレポレートからBI金利に変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行